

# 古市遺跡群 XXXVI

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 **75**

2015

羽曳野市教育委員会

# 古市遺跡群 XXXVI

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 75

2015

羽曳野市教育委員会

## 序

大阪府の東南部に位置する羽曳野市は、金剛、葛城の山並みを仰ぎ、石川がゆるやかに流れる、水と緑に恵まれた自然豊かなところです。このような自然環境は太古の昔から人々の暮らしを営み、文化を育んできました。長い時の流れの中で残された数多くの歴史的遺産は、今も大切に受け継がれています。本市ではこれらの豊かな自然や歴史的遺産を活かし、「人と時をつなぐ 安心・健康 躍動都市 はびきの」を市の将来像と定め、まちづくりを進めています。本冊は、国庫補助事業として実施した市内に所在する埋蔵文化財の発掘調査の成果を報告するものです。大黒遺跡の調査では、古墳時代後期の溝と中世の柱穴、土坑とともに石組遺構を検出し、この時期の遺物も出土しました。また峯ヶ塚古墳では第13次の調査を行い、西側及び南側外堤の様子を確認するなど、重要な成果がありました。

調査の実施にあたり、土地所有者をはじめとする関係者の方々、関係各機関のご協力を賜りましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも本市がすすめる文化財行政に一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

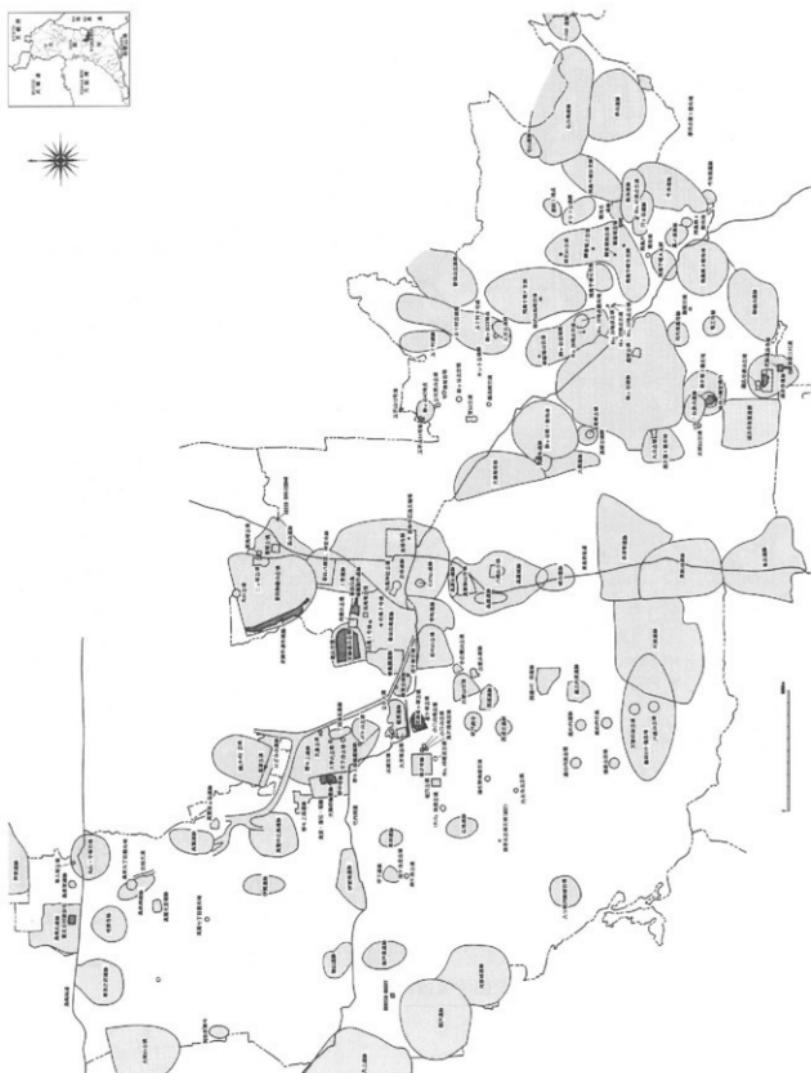
平成27年3月  
羽曳野市教育委員会  
教育長 高崎 政勝

# 目 次

序	
例言	
羽曳野市埋蔵文化財分布図	1
調査位置および調査概要一覧	2
壺井第3散布地	9
栗塚古墳	13
大黒遺跡	17
峯ヶ塚古墳	33
報告書抄録	
写真図版	

## 例 言

1. 本書は平成26年度に羽曳野市教育委員会が国庫補助事業として計画、実施した羽曳野市内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は本市教育委員会生涯学習室社会教育課歴史文化推進室室長 高野学、参事 吉澤則男、武村英治の指導のもと、課長補佐 井原稔を担当者として、平成26年4月1日に着手し、平成27年3月31日をもって終了した。ただし、本書は作成の都合により平成25年10月1日から平成26年9月30日までの間に実施した調査について収録した。壺井第3散布地、栗塚古墳、大黒遺跡は井原稔、峯ヶ塚古墳は吉澤則男が調査を担当した。
3. 発掘調査等において、ご指導、ご協力を頂いた方々や関係機関は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。(敬称略、順不同)。  
文化庁、官内庁書陵部古市陵墓監区事務所、大阪府教育委員会、土地所有者、工事主体者および関係者
4. 本書で使用する調査位置図等に使用する地図は、地形、工作物等の概略を示すもので、土地境界、建物位置などを厳密に示すものではない。
5. 遺構写真の一部と出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房による。
6. 本書作成には社会教育課歴史文化推進室職員があたり、編集を井原 稔が行った。



市内遺跡分布図

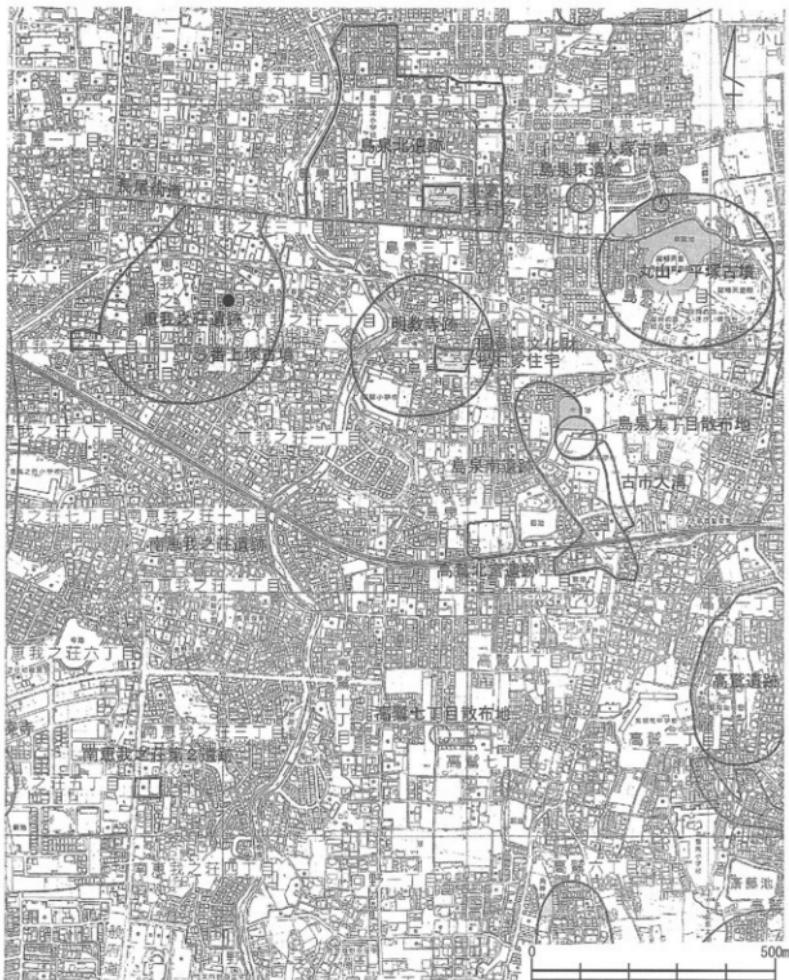


図1 調査箇所位置図1（恵我之荘遺跡）

遺跡名称	開発番号	調査開始日	調査終了日	所在地	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査概要
恵我之荘遺跡	13-03	H25.10.24	H25.10.24	恵我之荘 2丁目 96-1 の一部	個人住宅	7.1	敷地内に調査区3ヶ所を設定し、重機掘削の後、肝臓及び平面の上部を調査した。基盤振幅は現地表面下0.32mであることから、掘削深度はこれに準じた。この範囲では、造成土及び駐車場盛土のみで、遺構及び遺物包含層は認められなかった。

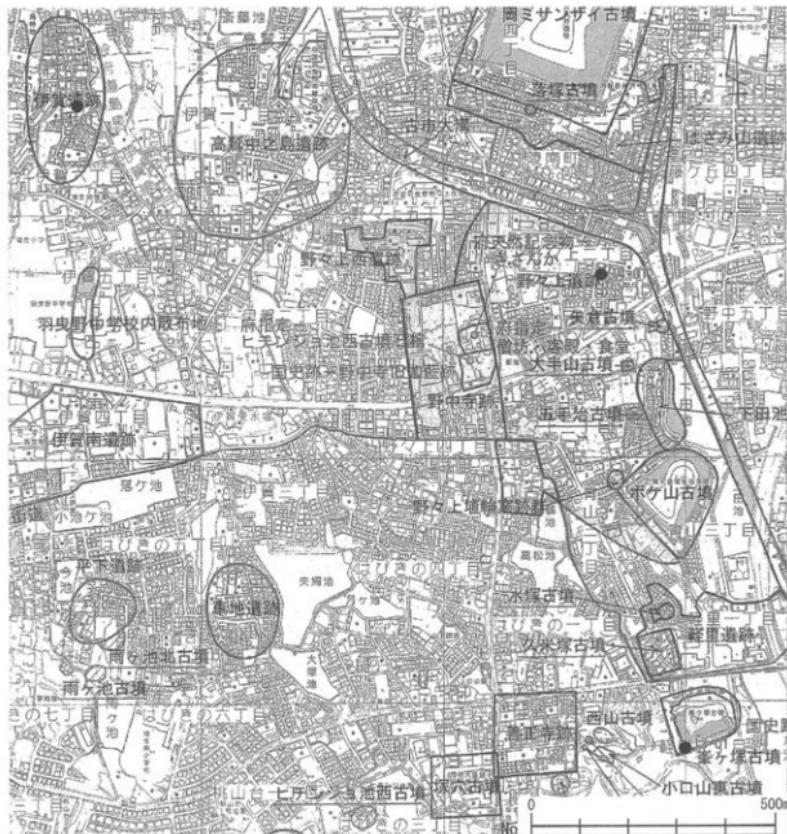


図2 調査箇所位置図2(伊賀遺跡・野々上遺跡・峯ヶ塚古墳)

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	所在地	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査概要
峯ヶ塚古墳	13-01	H26.1.20	H26.3.25	轟里2丁目 42-1, -2	確認調査	1000	本書掲載
伊賀遺跡	14-01	H26.5.9	H26.5.9	伊賀6丁目 143-6 の一部	個人住宅	99	申請地内に調査区を2か所設定し、重機掘削後、確認を行う。第1調査区は基礎深まで約4m掘り下げるが、近年の盛土及び耕土であった。第2調査区は薄い表土層の下層に約0.35mの遺物包含層が堆積し、地山となる。地山面では遺構を確認した。但し、遺物範囲外で掘削前はないため支障はない。少量の遺物が出土した。
野々上遺跡	14-01	H26.8.27	H26.8.27	野々上 2丁目 44-15	個人住宅	39	申請地内に調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行った。現地表面から約1.2m掘り下がたが、表土、盛土、耕土、砂層と続く。遺構・遺物は全く確認できなかった。

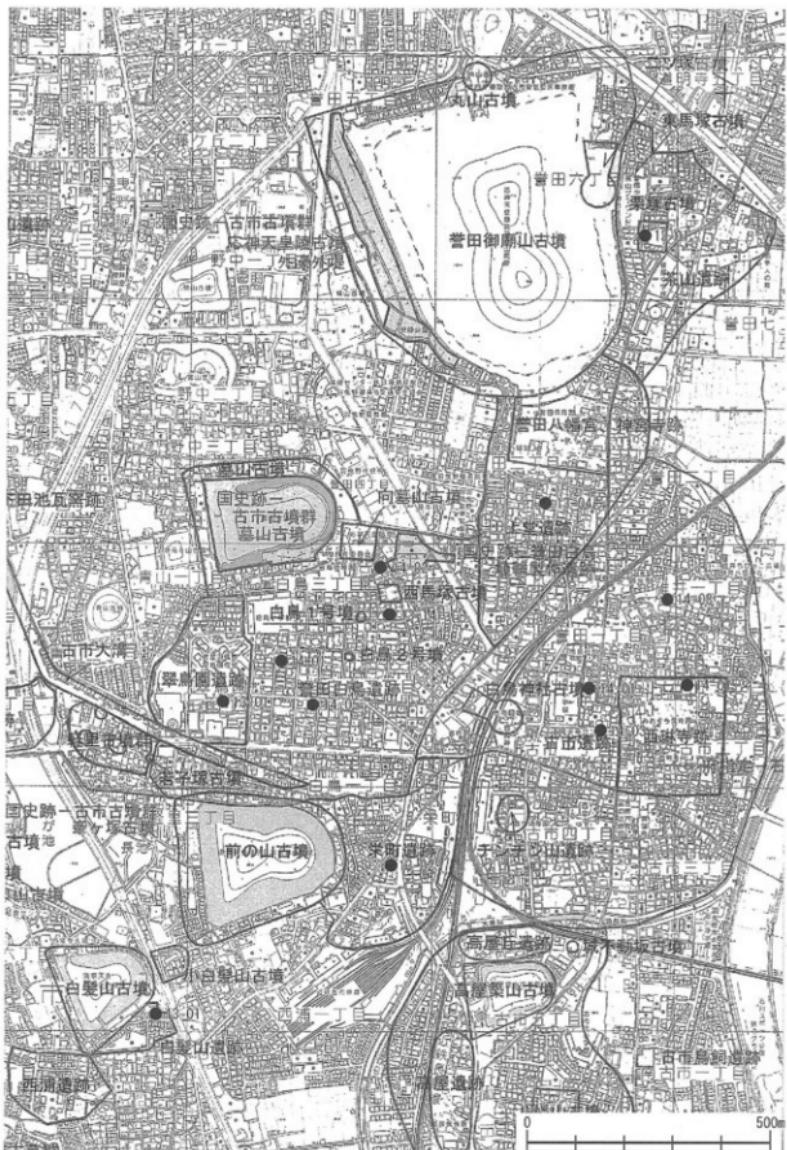


図3 調査箇所位置図3（栗塚古墳・上堂遺跡・古市遺跡・西琳寺跡・誉田白鳥遺跡・翠島園遺跡・宮町遺跡・白髮山遺跡）

遺跡名稱	調査番号	調査開始日	調査終了日	所在地	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査概要
秦塚古墳・ 茶山道跡	13-01	H26.1.6	H26.1.9	譽田6丁目 631-2	個人住宅	12.0	本音岡裁
上空道跡	13-04	H26.1.16	H26.1.16	譽田3丁目 1243の一部、 1267-2、-3	個人住宅	7.6	申請地内の最も高い場所に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から0.4m掘り下げるが、盛土、旧表土、オリーブ灰色混砂質土と続く一部、削除あるいは落ち込みと考えられる遺構を検出したが、基礎よりも深かつたため文脈なしと判断した。また、調査区より南側はGより0.4mほど低く、今回調査はないとのことであった。
早島園道跡	13-01	H26.3.27	H26.3.27	早島園 363-4 の一部	個人住宅	6.4	申請地内に2か所調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行う。第1調査区は現地表面から0.4m(基礎深)、第2調査区は0.5m掘り下げる。どちらも表面の下層は耕土、灘黄色混砂質土層と続く。両調査区とも0.4mの深さで遺構を検出し、埴輪が出土した。古墳の周溝の可視性もあるが、確認できなかった。遺物基礎はこれ以上上掘することはないでの、支撑はない。
譽田白鳥道跡	13-14	H26.1.17	H26.1.17	白鳥3丁目 231-20	個人住宅	4.8	申請地内に2か所調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行う。第1調査区は現地表面から0.4m、第2調査区は0.8m掘り下げる。盛土(0.2m)、田畠成土(0.2m)、耕土、灰青色砂質土上、黄灰色粉質土と続く。遺物内は基礎が盛土及び造成土内におさまるため支撑はない。遺構・遺物は確認できなかった。
譽田白鳥道跡	14-01	H26.5.2	H26.5.2	白鳥2丁目 350-34	個人住宅	2.8	申請地内に調査区を設定し、重機掘削後、確認を行う。現地表面から約0.5m掘り下げるが、盛土の下層は耕土、末土と続く。基礎は遺構まで達しないため、支撑なし。遺構・遺物も確認できなかった。
譽田白鳥道跡	14-02	H26.5.30	H26.5.30	白鳥3丁目 238-4 の一部	個人住宅	3.0	申請地内の最も基礎が深くなる部分に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から11m掘り下げる。上層0.5mは近年の盛土、その下層は近年の盛成土(0.4m)、オリーブ色粘土層と続く。この層から埴輪1点の出土が見られた。
譽田白鳥道跡	14-05	H26.9.26	H26.9.26	白鳥2丁目 320-19	個人住宅	4.0	申請地内に調査区を設定し、重機掘削後、観察を行う。現地表面から約0.4m掘り下げるが、整地上(0.25m)、黄灰色混砂質土層(0.5m)と続き、一部に地山層が見られた。遺構・遺物は確認できなかった。
栄町道跡	13-02	H25.12.4	H25.12.4	栄町643-6	個人住宅	6.0	申請地内に2か所、調査区を設定し、重機掘削を行なう。現地表面から0.2~0.35m掘り下げるが、両調査区ともすでに近年の盛土であった。遺構・遺物は確認できなかった。
古市道跡	14-01	H26.4.17	H26.4.17	譽田1丁目 944番、 995番	個人住宅	5.0	申請地内に1か所調査区を設定し、重機掘削を行なう。現地表面から0.3m掘り下げるが上層0.2mは表土、下層0.1mは近世の包含層であった。遺物は確認できなかった。
古市道跡	14-03	H26.6.2	H26.6.2	古市1丁目 80-18	個人住宅	7.5	申請地内に調査区を設定し、重機掘削で0.5~0.7m掘り下げる。人力で精査を行う。現地表面から0.5mで地山層となり、直上は盛土となる。調査区中央では幅3mの擾乱が見られた。少量の遺物の出土はあったが、遺構は検出できなかった。
古市道跡	14-08	H26.8.18	H26.8.18	稚井1丁目 741-1、 744の 各一部	個人住宅	2.0	申請地内の深基盤部分に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から約1m掘り下げる。上層0.2mは表土、下層はオリーブ灰色混砂質土の遺物包含層であった。深基礎は一部分であり、他の基礎部分はほとんど掘削することがないため、支撑はない。
西野寺跡・ 古市道跡	14-01	H26.4.14	H26.4.14	古市2丁目 125-55 の一部	個人住宅	3.4	申請地内に調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行なう。現地表面から約0.4m掘り下げるが、すべて近年の盛土であり、部分的に包含層が残り、遺物の小片が数点出土した。遺構は確認できなかった。
白髪山道跡	13-01	H25.10.21	H25.10.21	西浦6丁目 2244-2 及2245-3	個人住宅	5.5	申請地内に調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行なう。現地表面から0.4m掘り下げるが、表土及び耕土であり、遺構・遺物は確認できなかつた。

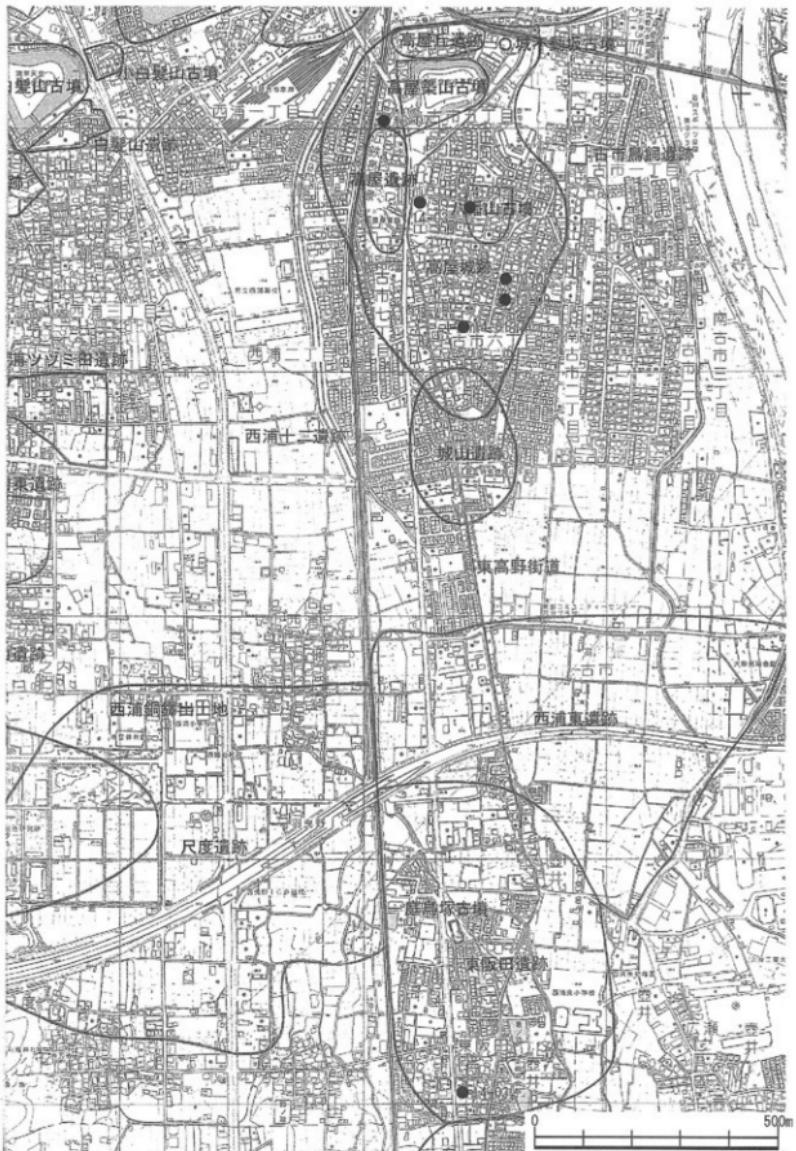


図4 調査箇所位置図4（高屋城跡・八幡山古墳・東阪田遺跡）

遺跡名跡	調査番号	調査開始日	調査終了日	所在地	調査原因	調査面積(㎡)	調査概要
高屋城跡	13-08	H26.2.17	H26.2.17	古市6丁目 900-259	個人住宅	6.2	申請地内に調査区を2か所設定し、重機掘削後、人力にて精査を行う。現地表面から01~02m掘り下げるが、すぐに地山層が現れ、すでに上面が削平されていることが判明した。遺構・遺物は確認できなかった。
高屋城跡	13-09	H26.2.18	H26.2.18	古市6丁目 900-213 の一部	個人住宅	5.0	申請地内に調査区を設定し、重機掘削前、人力にて精査を行う。現地表面から0.4m掘り下げるが、近前の盛土の下層は一部にオリーブ灰色混砂粘質土(盛土・炭化物が混じる)の青い包含層が見られる。ただ大部分が埋乱であり、遺構・遺物は確認できなかった。
高屋城跡	14-01	H26.4.30	H26.4.30	古市6丁目 1090番 の一部	個人住宅	3.6	申請地内の建物外に1か所調査区を設定し、重機掘削を行い、人力にて精査を行う。建物部分は、設計GLより0.2m強下がっており、ほぼ掘削することがないため、掘削は行わなかった。外では現況から約0.3mで地山層となり、一部遺構・遺物も見られた。
高屋城跡	14-03	H26.5.14	H26.5.14	古市5丁目 900-2	個人住宅	7.0	申請地内に2か所調査区を設定し、重機掘削を行った。現地表面から0.4~0.8m掘り下げるが、すべて近年の盛土であり、遺構・遺物は確認できなかった。
高屋城跡・ 八幡山古墳	14-04	H26.8.22	H26.8.22	古市5丁目 900-192	個人住宅	6.0	申請地内に2箇所調査区を設定し、重機掘削後、精査を行い観察を行った。現地表面から0.6~0.75m掘り下げるが、0.6mまでは盛土で、下層は耕土であった。遺構・遺物は確認できなかった。
東阪田遺跡	14-03	H26.9.1	H26.9.1	東阪田 287-1、 289-6	個人住宅	2.8	申請地内に調査区を2箇所設定し、重機掘削後、観察を行う。現地表面から0.5~0.6m掘り下げる。層序は、盛土、耕土、地山と続く。耕土内に数点の遺物が見られたが、すでに大きく削平されている可能性が考えられる。遺構は確認できなかった。



図5 調査箇所位置図5（大黒遺跡・壺井第3散布地）

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	所在地	調査原因	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査概要
大黒遺跡	13-01	H25.10.11	H25.10.29	大黒444番 及び445番 の一部	個人住宅	50.0	本審掘歴
大黒遺跡	13-02	H26.3.3	H26.3.3	大黒367-1	個人住宅	6.4	中調査内に調査区を設定し、重機掘削後、入力にて精査を行った。現地表面から0.4m掘り下げるが、ほぼ表土であり、下層に茶褐色粘質土層(遺物包含層)と続く。少量の遺物の出土があったが、基本此處は盛土内におさむため支障はない。
壺井第3散布地	14-01	H26.4.15	H26.4.26	壺井413-1	個人住宅	63.0	本審掘歴

## 壺井第3散布地

石川東岸の丘陵縁辺、東西350m、南北350mの広さをもつ。遺跡内には前九年の役後に源頼義と義家の父子が石清水八幡宮から勧請し創建した壺井八幡宮（康平7年：1064）と義家の五男、源義時が源氏の氏神として創建した壺井神社（天仁2年：1109）が鎮座する。また遺跡に食い込むようにお旅山遺跡が存在する。遺跡の北には弥生時代の高地性集落が発見された駒ヶ谷遺跡、南には河内源氏の墓所がある国史跡通法寺跡及び通法寺遺跡、南西には通法寺条理遺構が位置している。

遺跡周辺の丘陵先端部分は早くから土砂採集などにより大きく改変されており、遺跡の西に存在した御旅山古墳（全長44m：前方後円墳）も土砂採集によって破壊されている。以前から丘陵の周辺では土師器、須恵器、瓦類等の散布が見られ遺跡が存在することが指摘されていた。その後、昭和46年、47年の大阪府教育委員会による近飛鳥遺跡分布調査や同60年の羽曳野市教育委員会による埋蔵文化財分布調査が行われて遺跡の存在が確認されており、さらに平成2年には駒ヶ谷遺跡調査会が一部の試掘調査を実施し、遺構を確認している。

### 調査に至る契機と経過（14-01）

申請地は壺井八幡宮の南麓に広がる集落内の最北端に当たる。集落は壺井八幡宮と河内源氏の墓所のある通法寺跡をつなぐ道の両側に貼りつくように広がっている。

これまで周辺での調査例は少なく、その実態はいまだ明らかとなっていない。しかし解体した家屋は昭和初期のもので、基礎が浅いことから遺構が残存している



図6 遺跡内位置図



図7 調査区位置図

可能性があることから、協議の結果、事前に試掘調査を実施することとなった。

調査は平成26年3月26日（羽生教社2585号）で埋蔵文化財発掘の届出書の提出を受けて、平成26年4月15日に事前調査を実施したところ、遺構及び遺物を検出したため、申請者と協議を行い、4月22日より4月26日まで本調査を実施した。調査面積は約63m<sup>2</sup>を測る。

## 基本層序

層序は上層から表土、灰黄色混砂弱粘質土及び灰褐色混砂粘質土、地山（黄白色粘質土）となり、地山層まで約0.3mであった。地山面で柱穴や溝を検出した。

また調査区の南へ向かうほど遺構の残存状況が悪く、近年まで大きく掘り返されている痕跡も確認できた。さらに調査区南側で確認されたオリーブ黒色混砂弱粘質土からは江戸時代と考えられる磁器の小片が出土していることから江戸時代以降に堆積した可能性がある。

## 遺構

調査区内では、溝、土坑、柱穴、掘立柱建物を検出した。遺構は中世から近世にかけてのものであり、比較的新しい段階のものであった。

溝は調査区中央で南北方向に並走する3本を検出した。溝の幅は狭い所で約0.2m、広い所で0.6mを図る。溝の深さは0.1~0.2mと浅い。溝の堆積土は灰色またはクリーム色の砂質土で、遺物の出土はほとんど無かった。

掘立柱建物は調査区北西で検出した。主軸をやや北西に向かた南北2間以上×東西2間の建物で、柱穴の底には東石と考えられる扁平な石材が埋められているものが見られた。柱穴の底までが比較的浅いため、上面がすでに削平を受けている可能性が考えられる。また建物周辺には柱穴がまばらに確認でき、柱穴底に東石が残っているものが数か所で見られた。

土坑は溝2を切るように築かれた直径0.2mを測るものである。土坑内には10cm大くらいの河原石が敷き詰められていた。石を取り除くとすぐに底に達した。遺構の中では一番新しい時期のものと考えられ、近世頃であろう。

## 遺物（図9）

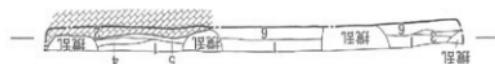
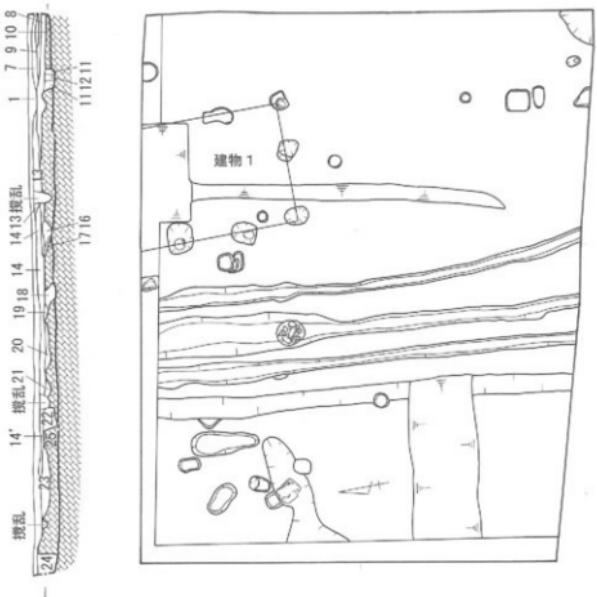
1・2は瓦器碗である。復元口径は10~11cm、復元器高は2.7~3.1cmを測る。外面口縁端部はヨコナデ、その下は指オサエが見られるがヘラミガキは省略されている。内面にはヘラミガキが施されている。高台は退化し見られない。14世紀前後であろう。

3は瓦質深鉢と考えられる。口縁部の一部のみ残存する。復元口径は21.2cmを測る。口縁端部はヨコナデによってまるくおさめられている。外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のヨコナデのちヘラミガキが密に施されている。

4は瓦質羽釜である。鋤部分の一部が残存する。外面には横方向のヘラケズリ、内面にはヨコハケを施すが、内外面とも摩耗により調整は観察しづらい。

5は須恵器の壺あるいは甕の口縁部と考えられ、一部のみ残存する。口縁部には端部下1cmまで回転ナデ調整が施されるため、内外面ともナデによる接線が明瞭である。外面にはカキ目状の痕跡が見られる。色調は灰白色を呈する。

6は青磁碗の一部である。口縁部外面に蓮弁文がわずかに確認できる。色調はうぐいす色を呈する。7~9は瓦である。7は軒丸瓦である。瓦当部分の1/5ほど残存している。内区には巴文を配し、



- |                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| ① 2. 515/3 黄褐色混砂粘質土           | ⑩ 10YR6/2 にふい黄褐色重砂粘質土      |
| ② 515/4 青褐色砂質土                | 2. 514/1 にふい黄褐色砂粘質土 (灰まじる) |
| ③ 515/5 にふい黄褐色砂粘質土            | 2. 514/2 にふい黄褐色砂粘質土        |
| ④ 515/6 にふい黄褐色砂粘質土            | 2. 514/3 にふい黄褐色砂粘質土        |
| 2. 514/2 青灰黃色 (灰の限を含む) 重砂粘質土  | 2. 514/4 にふい黄褐色重砂粘質土       |
| 19YR6/2 にふい黄褐色 (灰の限を含む) 重砂粘質土 | 10YR6/2 にふい黄褐色重砂粘質土        |
| 19YR6/4 にふい黄褐色 (灰の限を含む) 重砂粘質土 | 10YR6/3 にふい黄褐色重砂粘質土        |
| 19YR6/2 にふい黄褐色重砂粘質土           | 2. 515/6 黄褐色砂              |
| 19YR6/6 新黄褐色重砂粘質土             | 10YR6/2 黄褐色砂質土             |
| 2. 515/2 黄褐色砂質土               | 10YR5/3 にふい黄褐色砂質土          |

0 4m

図8 遺構平面図及び断面図

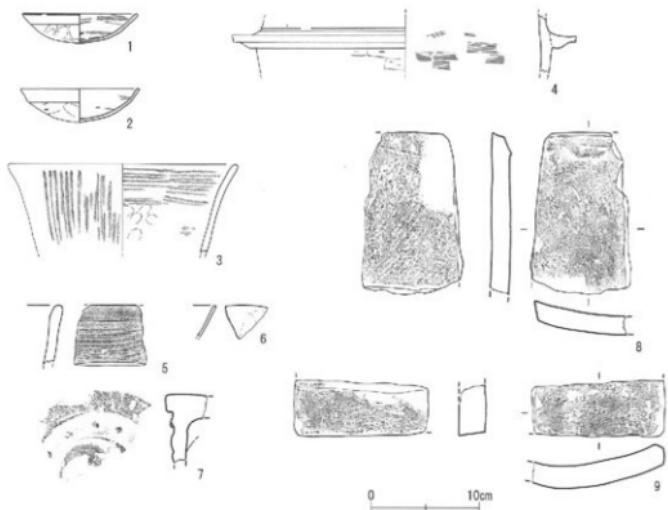


図9 出土遺物

外に珠文をめぐらす。巴文と珠文との間には圈線は見られない。色調はやや緑がかった灰白色を呈する。8・9は平瓦である。全体の1/4ほど残存する。どちらの瓦も火を受けた痕跡が見られ、煤によるものか黒く変色している。このため調整は不明瞭である。9については罐面を丁寧に面取り調整が施されている。

### まとめ

今回の調査場所は壺井八幡宮の直下に当たり、出土した遺物を見ると14~15世紀のものが多く、室町時代を中心とした遺構が残っていたと考えられる。今回出土した平瓦には、火を受けた痕跡がうかがえるものが見られ、火災にあったことが考えられる。これは文献などから元中八年（1391）に畠山基國による楠正成討伐に際する戦火によって焼失した時の遺物である蓋然性が高い。

また河内名所図会によると江戸時代には調査地には社司が存在していたようだ。江戸時代以降の遺構や遺物はほとんど出土しなかったが、図会には壺井八幡宮周辺に化輪寺跡や集落が広がっている様子が描かれていることから、今後の調査によって近世の遺構も次第に明らかになるであろう。

## 栗塚古墳

本古墳は古市古墳群の盟主である応神天皇陵古墳東側の低位段丘上に広がる茶山遺跡内に位置している。墳丘部分は現在、宮内庁により「応神天皇恵我藻伏崗陪冢<sup>イ号</sup>」として治定されており、応神天皇陵古墳の陪塚と考えられている。周辺には、応神天皇陵古墳に隣接する二ツ塚古墳（墳丘長120mの前方後円墳）、北側には同じく「陪冢<sup>イ号</sup>」として治定されている東馬塚古墳（一辺32mの方墳）、既に削平された茶山1号墳（一辺10mの方墳）が位置している。一方、古墳東側には東高野街道が通っている。

一帯は茶山遺跡に該当しており、周辺の発掘調査では円筒埴輪棺や土師器埋納土坑の発見が顕著である。これは、北側に隣接する土師氏の居住域と考えられている土師の里遺跡と類似する特徴を有しており、現行では行政区分によってわかっているが、本来は一連の遺跡であったと考えられる。また『日本書紀』雄略天皇の条に記されている「田辺史伯孫の埴馬伝承」の舞台がこの周辺ではないかと推測されている。

古墳については、昭和3年の栗塚古墳の測量図によると古墳の西・北側に周濠が存在しており、周濠を有する方墳であることがわかつっていた。昭和63年からの住宅建設に伴う調査では、測量図を証左する古墳南側の周濠の状況が明らかとなった。これによると宮内庁が指定している古墳範囲よりもさらに大きくなり、墳丘規模は一辺43m、検出面での周濠幅は約8.5m、深さ0.7mを測る。外堤の南西隅で埴輪列を確認し、墳丘及び外堤周濠側斜面、周濠底には葺石が敷かれていた。墳丘周濠内の上層から土師器、下層から埴輪が大量に発見された。埴輪は口



図10 遺跡内位置図



図11 調査区位置図

径が40cmを越える大型円筒埴輪を中心に家・団み・盾・蓋・冠帽・人物・鶏・馬・犬などの多種多様な形象埴輪が見つかっている。

これらの調査成果から、墳丘規模、周濠幅などの墳丘構造が明らかとなり古墳主軸の復元から応神天皇陵古墳外堤と並行していることが判明した。また使用されている円筒埴輪の大きさや調整の特徴から応神天皇陵古墳の外堤に使用されていた埴輪と類似することなど応神天皇陵古墳と栗塚古墳が同じ規格設計のもとに築造された蓋然性が高くなった。

### 調査に至る契機と経過（13-01）

申請地は栗塚古墳の西側の周濠に当たる。当初は基礎が浅く立会調査としていたが、基礎変更に伴って発掘調査に変更した。平成4年度の調査では当該地の南側で周濠が確認されているため、周濠にあたることが確実であることから協議を行い、事前に試掘調査を実施することになった。

調査は平成25年12月5日（羽生社2442号）で埋蔵文化財発掘の届出書の提出を受けて、平成26年1月6日に事前調査を実施したところ、周濠及び埴輪の出土があったため、申請者と協議を行い、同日より平成26年1月9日まで本調査を実施した。調査面積は約12m<sup>2</sup>を測る。

なお調査は、基礎の関係上、現状より2m以上の深さとなったことにより壁面が崩壊したため、調査の安全性を優先して、緊急で埋め戻し作業を行った。

調査区内では、一部で地山面と葺石を確認し、少量の埴輪片が出土した。

### 基本層序及び遺構

調査区は地盤改良工事に伴い基礎が深くなるため、古墳の墳丘裾に対して垂直に調査区を設定し、確認調査を実施した。深い所で現地表面から2.8mまで掘り下げた。上面から1m下までが近年の盛土、その下層は造成土（0.3m）、擾乱土（埋め戻した土か）が1.5mとなる。擾乱土の下層から地山面を検出し、葺石と思われる拳大の石材を確認した。

調査区周辺は、近年まで本古墳の濠が残っており、擾乱土は造成時に埋め戻した土と考えられる。濠の輪郭はやや削平を受けているが、葺石と考えられる石材が外堤斜面に吹かれていたことが確認できた。

ただし壁面の崩壊により周濠底の確認までは至らなかった。

平成4年度の周濠調査の結果を追認することとなった。

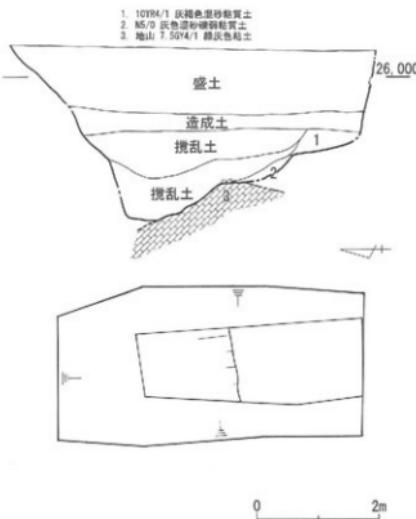


図12 調査区平面図及び断面図

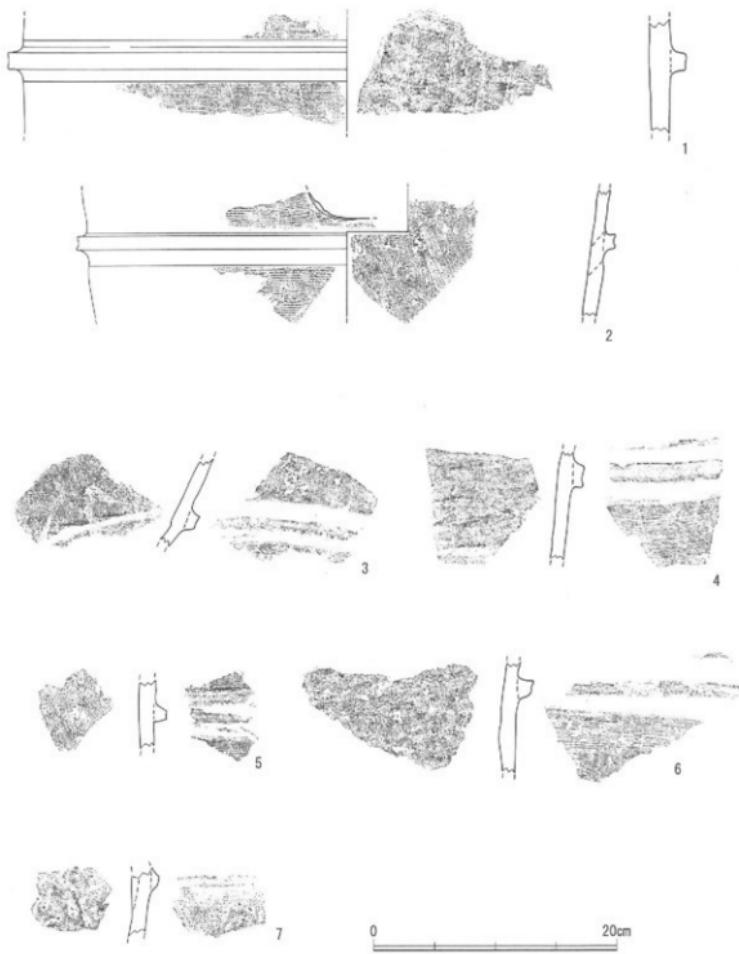


図13 出土遺物

## 遺物

出土した遺物で図化できたのは埴輪のみで、その他青磁碗、瓦の破片が見られた。

1、2、4～7は円筒埴輪である。1は復元口径53cmの大型円筒埴輪である。タガは2.1cm、器壁は1.5cmの厚みを測る。外面にはBd種ヨコハケ、内面にはかすかにヨコハケが見られる。色調は淡い橙色を呈する。2は復元口径44.4cmを測る。よく焼きしまって須恵質化している。外面にはヨコハケ、内面には指ナデが見られる。色調は外面は薄いレンガ色、内面はやや赤みがある褐色を呈する。4も1同様大型品と考えられる。タガの厚みは2.3cmある。外面にはかすかにBc種ヨコハケが残存するが、内面は摩耗により観察できない。色調はクリーム色を呈する。5は外面にヨコハケ、内面にもヨコハケがかすかに残る。6も1や4同様タガが大きいため大型品の可能性が考えられる。外面にはBc種ヨコハケ、内面にはかすかにヨコナデが観察できる。7は摩耗が激しく内外面とも調整は観察できない。3は朝顔形埴輪の一部である。全体的に摩耗により調整は観察できない。

## まとめ

今回の調査によって栗塚古墳外堤斜面の一部を確認し、斜面には葺石が施されていることがわかった。周濠には底近くまで新しい遺物が混じる擾乱土と考えられる堆積土が見られることから、近年の開発で周濠が埋め戻されたことが理解できる。

平成4年度の調査では、外堤内側法面に葺石が葺かれていたことから、今回の調査でもこれまでの結果を追認することとなった。

## 大黒遺跡

大黒遺跡は石川と駒ヶ谷丘陵とに挟まれた自然堤防上に東西約150m、南北約450mの広さに存在する。北には隣接して大黒散布地、大黒寺を中心とした大黒寺遺跡、東側丘陵には弥生時代から古墳時代の遺物が散布する駒ヶ谷第1散布地、南東部の懐風館高校には高塚古墳群が存在していた。

本遺跡は平成5年の住宅建設に伴う試掘調査ではじめて発見された。この時の調査で、柱穴や井戸、土坑などが検出されているが、出土した遺物から中世を中心とした遺構であることがわかった。さらに平成10年、11年の調査でも15～16世紀の中世後半に属する遺構や遺物が検出されている。特に平成11年度の調査では、深く掘削された大きな溝が発見された。周辺には「垣内」などの小字名が残ることから、この溝が垣内集落に伴う堀の可能性が指摘された。平成13年度の調査では、12世紀後半の遺物が集中して見られるなか、弥生時代から古墳時代の土器も散見されたことから、弥生時代ごろには遺跡周辺で生活基盤が成立していた可能性も考えられる。

これまでの調査で中世の遺構や遺物の出土が顕著であり、遺構では掘立柱建物、井戸、埋甕遺構、大きく掘り込んだ溝などが、遺物では在地の羽釜や土師質の小皿、瓦器椀、瓦質土器などが発見されており、中世を中心とした集落遺構の状況が徐々に明らかになってきている。

しかしながら、古墳時代以降の遺物の出土も次第に多くなってきているものの、明確な遺構の発見までは至っていない。

中世遺構が顕著な背景には、大黒寺を中心とする門前町として大黒集落が成立・発展してきたからであろう。



図14 遺構内位置図



図15 調査区位置図

## 調査に至る契機と経過（13-01）

申請地は大黒寺の南側に広がる集落内の一角に当たり、中世より大黒寺の門前町的な集落として形成されていたこともあり、中近世の遺構・遺物が頻繁に発見される場所でもあった。このことから当該地で遺構が発見される可能性が高いことから、協議の結果、事前に試掘調査を実施することとなった。

調査は平成25年8月22日（羽生社2258号）で埋蔵文化財発掘の届出書の提出を受けて、平成25年10月11日に事前調査を実施したところ、遺構及び遺物を検出したため、申請者と協議を行い、同年10月16日より10月29日まで本調査を実施した。調査面積は約50m<sup>2</sup>を測る。

### 基本層序

調査区は地盤の関係で現地表面から約1.5mまで表層改良工事が実施されるため、最大深度1.5mまで掘り下げた。遺構面は2面あり、上面は中世、下面は古墳時代から奈良時代頃と考えられる。上面では石組遺構や柱穴、土坑などを検出した。下面では溝、柱穴等を確認し、それぞれ多くの遺物が出土した。

層序は、表土をめくるとやや黄色みがかった褐色の粘土層が見られ、かなり大粒の砂が混じっていた。その下層に褐色系の粘土層が厚く堆積し、大量の遺物が含まれていた。第1遺構面は灰褐色粘質土層及び黒褐色粘土層で石組遺構や集石遺構を検出した。その下層に第2遺構面となる地山層（黄色粘土層）と続く。地山層から表土上面まで約1mあり、大黒跡内では包含層が厚く堆積している場所であると考えられる。

### 遺構

#### 第1遺構面

##### 集石遺構

調査区中央やや東寄りで検出した遺構で、拳大の石が斑はあるものの密集して遺物などとともに広がっていた。遺構の範囲はかなり不明瞭で、明確な遺構検出ができなかった。石材の出土も規則性はなく、遺物においても瓦質土器を中心として瓦や土師質土器などが破片になって混じっていることから、廃棄土坑の可能性があるが断言はできない。

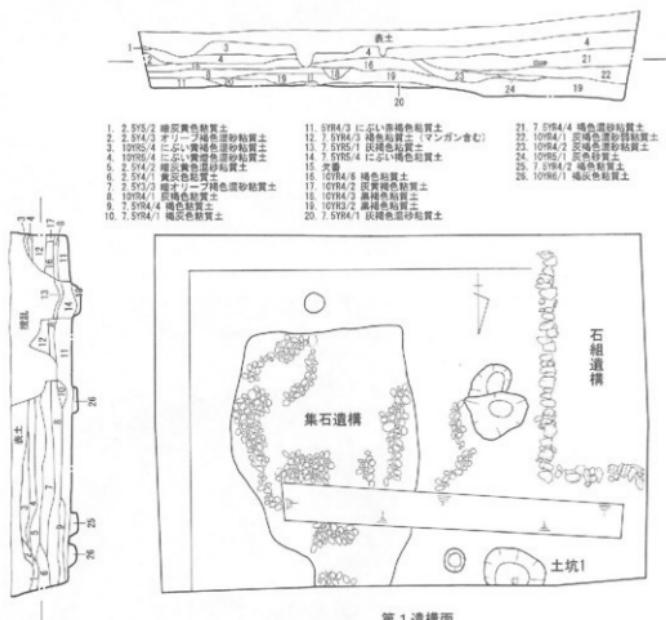
#### 土坑（写真1）

調査区北壁にかかるように発見された、直径約1m、深さ約0.4mを測る遺構である。検出面から遺構底までは逆半円状に2段階で狭くなり、底には直径約10cmの瀬戸焼の小皿が1枚敷かれていた。埋土からは同様の瀬戸焼の小皿の破片が見つかっているが、その他の遺物は確認されていない。埋土は茶褐色粘質土で、5cm大くらいの小石がまばらに混じっている。

出土遺物が少ないため、この遺構の性格を推し量の材料は少なく、推測の域を出ない。ただ今回の土坑との関連性は定かではないが、土坑に近接した東側の断面中から馬の下顎の骨が発見されており、もしこの遺構と馬の骨とが関連があるとすれば、祭事的な要素が考えられよう。

#### 石組遺構（写真2）

石組遺構は調査区西隅で発見された、南北3.8m以上×東西1.8m以上の方形の遺構で、30cm大のやや大きな河原石や瓦の破片を積み上げて築かれていた。しかし何段にも積み上げられていたわけでは



第1造構面

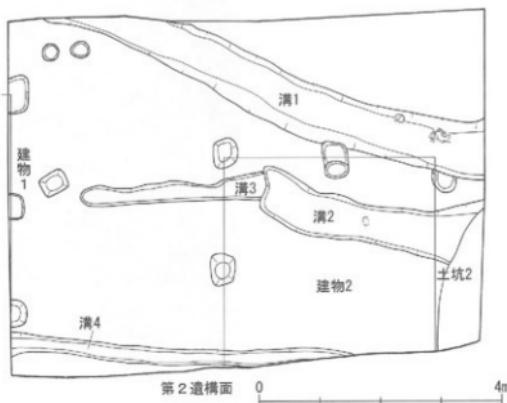


図16 調査区平面図及び断面図

なく高く積み上げられていた所でも2、3段で、北側では1段しか積まれていなかった。

遺構を状況的に見ると、第2遺構面を0.3mほど掘り込んで、その上面に石材を積み上げたというより並べていると考えられる方が自然ではあるが、遺構内に石材が散乱していた状況と、平面に石を敷いていた痕跡が確認できなかったことを考え合わせると、当初はもう少し高く石材が積み上げられており、上面の削平とともに遺構内に落ちたと考え方が理解しやすい。

築造時期については、石材の中に部分的に挟み込まれていた瓦は中世のものと考えられることから、おそらく中世に築かれた遺構と考えられる。しかしながらその用途については判然としない。ただ、近接して馬の下顎と思われる骨が発見されていることから、馬屋の可能性も指摘しておきたい。馬の骨については、北壁断面内から発見されたため、全体的な遺構の様相は確認できていない。

## 第2遺構面

掘立柱建物

建物1

調査区東壁部で確認した南北2間×1間以上の建物。検出した柱穴は方形で、一辺が0.4~0.6mの大きさを測る。ただし上面が削平されており、柱穴底まで10cmほどしかなかった。また埋土は茶褐色粘質土で、細かな土師器片が出土したのみで明確な築造時期を示す遺物の出土はない。大まかには古墳時代後半から奈良時代にかけての建物と考えられる。

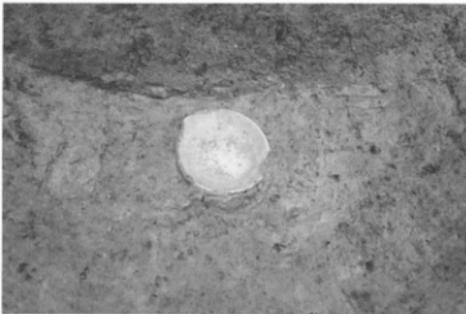


写真1 土坑底での瀬戸焼皿検出状況



写真2 石組遺構全景（南から）

## 建物 2

調査区中央やや西側で発見した南北 2 間以上 × 東西 2 間の建物。検出した柱穴は丸みをもった方形状の掘方で、大きさは 0.4~0.6m、深さは 0.2~0.5m を測る。埋土は灰褐色の砂を含む粘質土で、須恵器及び土師器の小片が出土した。このことから建物が築造された時期は古墳時代後半から末頃と考えられる。

## 溝

溝は調査区の東西方向に走り、4 本検出した。

溝 1 は最大幅約 1m、現存長 9.5m、深さ 0.15m を測る。堆積土は灰褐色系の粘質土で、溝の底からは土師器壺と須恵器高杯が出土した。

溝 2 は溝 3 を切る形で発見された。最大幅 1.2m、現存長 4.5m、深さ 0.1m を測る。溝中央の底から須恵器杯身が出土した。堆積土は溝 1 と同様に灰褐色系土であった。

溝 3 は溝 2 に切られており、最大幅 0.45m、残存長 3.1m、深さ 0.2m を測る。堆積土は褐色がやや強い粘質土で遺物の出土はなかった。

溝 4 は調査区内で最も北側に位置し、最大幅 0.3m、現存長 5.5m、深さ 0.2m を測る。堆積土は灰褐色系の粘質土でやや砂が混じる。出土遺物はなかった。

## 土坑

調査区の北西隅で確認された遺構で、弧を描くように丸みをもつ。復元すると直径が 2m 以上となることからおそらく井戸と考えられる。基礎の関係で、0.2m ほどしか掘削していないが、出土した遺物を見ると、瓦や瓦質土器など中世の遺物が目立ったため、この時期に塗かれた遺構と考えられるが、第 1 遺構面では確認することができなかったため、第 1 遺構面の時期よりは遅る可能性が考えられる。

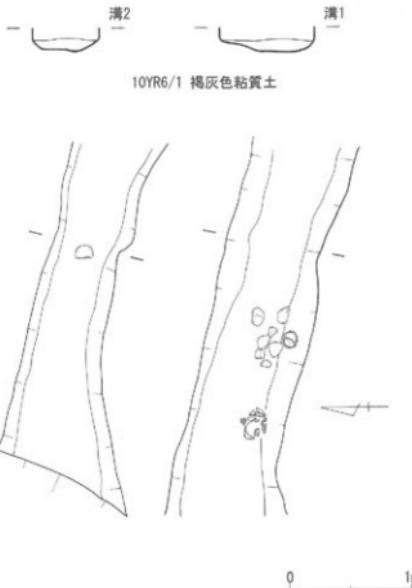


図17 溝 1・溝 2 平面図及び断面図

## 遺物（図版18～15）

### 須恵器（1～13）

1、2は杯身で、前者は口径11.2cm、器高5.2cmを測る。受部は短くやや上方に立ち上がり丸くおさめる。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は内側に面をもつ。外面は全面に回転ヘラケズリが施され、内面は回転ナデのち丁寧に磨かれている。色調は外面底部が灰白色、その他は茶色味がかった濃い灰色を呈する。5世紀後半ごろか。後者は復元口径9.8cm、残存器高2.8cmを測る。立ち上がりは比較的長く、端部は面をもつ。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

3は高杯で、杯身部分のみ残存する。口径は12.3cm、残存器高4.2cmを測る。杯底部には脚部が取付ていた痕跡が残る。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさめる。外面には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。4は蓋である。つまみ部分のみ残存する。つまみ径は3.5cmを測る。外面は回転ナデ、内面は丁寧にナデによって刷り消している。色調は灰色である。5は杯蓋である。全体の1/5ほど残存する。内面にはかえりが見られるが短い。復元口径は10.2cm、残存器高は2.2cmを測る。外面は回転ヘラケズリ、内面には回転ナデが施されている。6は器台の脚部か。外面には2条の沈線が施され、自然釉がかかる。7は椀の一部と考えられるが、あまりにも小さいので装飾壺の一部と思われる。体部に2条の突帯をもち、その下には波状文を巡らせている。色調は灰白色を呈する。8は壺である。復元口径19.2cm、残存器高5.7cmを測る。口縁部は頸部から緩やかに外湾し、端部は外側に肥厚させている。内外面とも自然釉がかかる。9、10は台付壺と考えられる。9は高台の一部のみ残存する。10はハの字に開くやや高い台をもち、復元底径12cmを測る。胎土は精緻で、色調は灰青色を呈する。外面は回転ナデ、内面は回転ナデのち不整方向に丁寧に撫でている。11は椀か。内外面とも火襷が残る。12、13は壺あるいは壺の口縁部である。

### 埴輪（14）

14は埴輪である。須恵質で体部の一部のみ残存する。外面にはタテハケ及び不整方向のハケが見られ、内面にもやや粗いハケ調整が観察できる。色調は薄い茶色を呈する。

### 土師器（15～20）

15は蓋と考えられる。つまみは円柱状に真っ直ぐに立ち上がり、上面はわずかにくぼみをもつ。内外面とも薄い橙色を呈する。16は高杯である。杯底部から脚部壠まで残存する。摩耗により調整等は観察できないが、杯部と脚部の接合方法がよく観察できる資料である。まず杯部の底部に穴を開け、そこに脚部を差し込んで、最終段階に粘土で補強している。17、18は甕である。前者は復元口径12.4cm、残存器高4.8cmを測る。口縁部は体部からくの字状に立ち上がり端部を丸くおさめる。内外面とも摩耗ではほとんど観察できないが、わずかに外面にハケ調整が残っている。色調は明赤褐色を呈する。後者は復元口径18.9cm、残存器高7.0cmを測る。口縁部は体部から大きく外反する。内外面とも摩耗により調整は観察できない。19は羽釜である。口縁部の一部のみ残存する。復元口径は28.4cm、残存器高5.7cm、銅径31cmを測る。口縁部は短く外湾し、銅は口縁部直下につく。内外面ともナデの痕跡がかすかに観察できる。色調は褐色を呈する。20は鉄鉢である。復元口径32.2cm、残存器高8.7cmを測る。外面は黒く燻されその後、ヘラミガキを施している。

### 土師質土製品（21）

21は円盤状の土製品と考えられるが、用途は不明である。

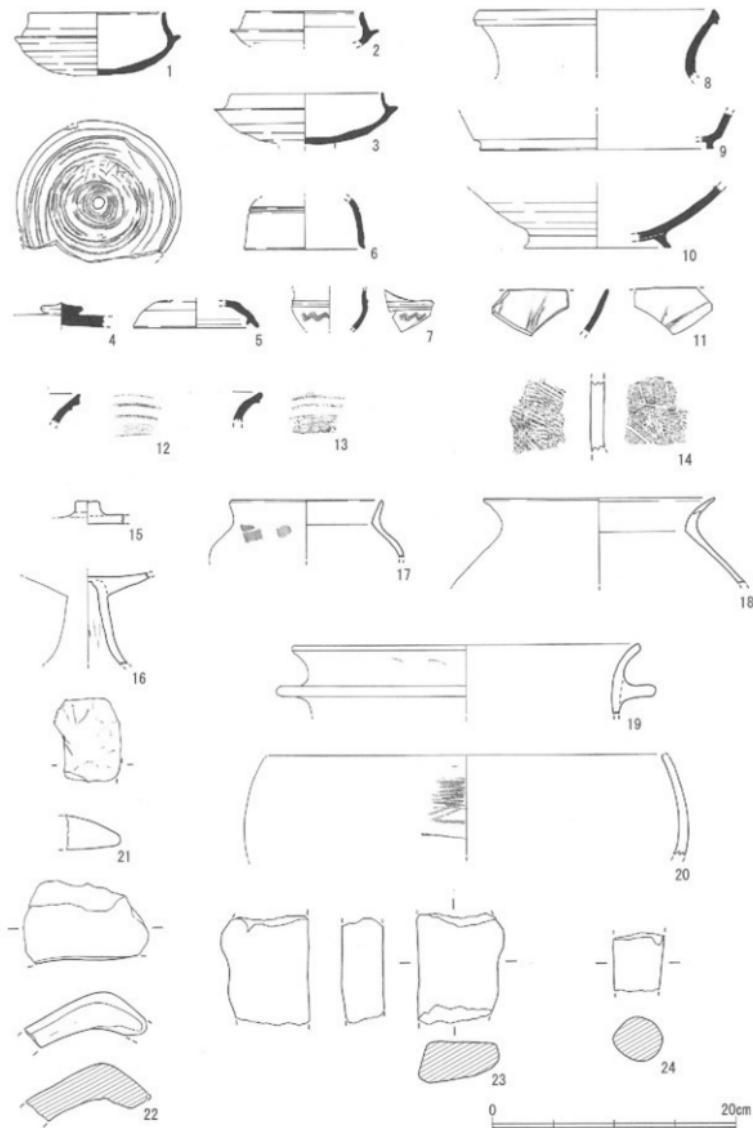


図18 出土遺物 1

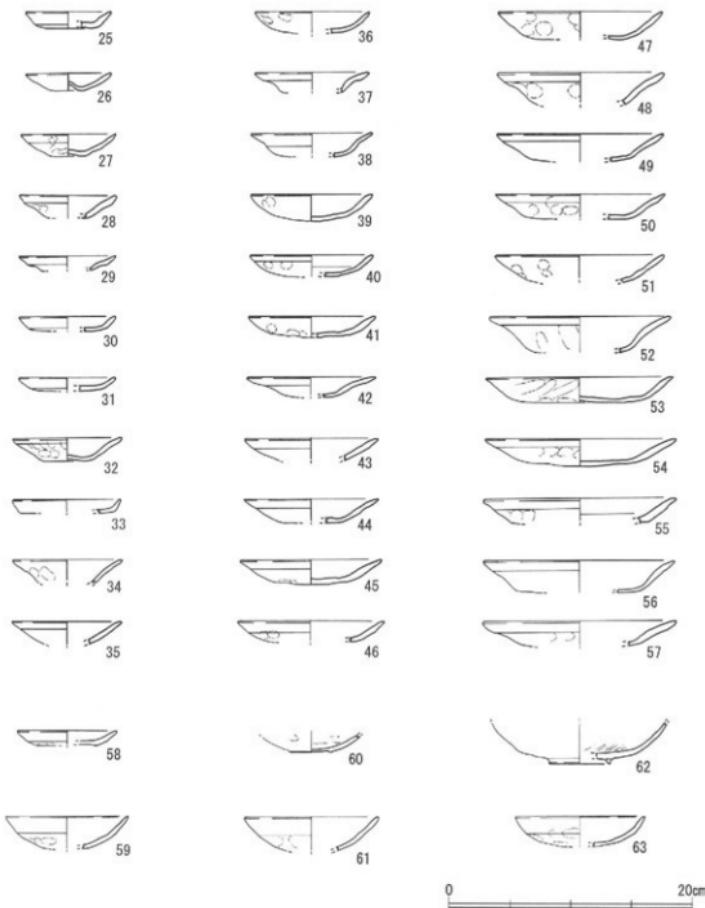


図19 出土遺物2

#### 石製品（22～24）

22は凝灰岩製のもので、火を受けた痕跡が窺える。L字状に加工しているが用途は不明である。23、24とも砂岩系の石材で23は長方形に、24は円柱状に加工している。

#### 土師皿（25～59）

総数で40点ほど出土したが、図化できるもの33点を掲載した。口径6.8～15.8cm、残存器高1.0～2.0

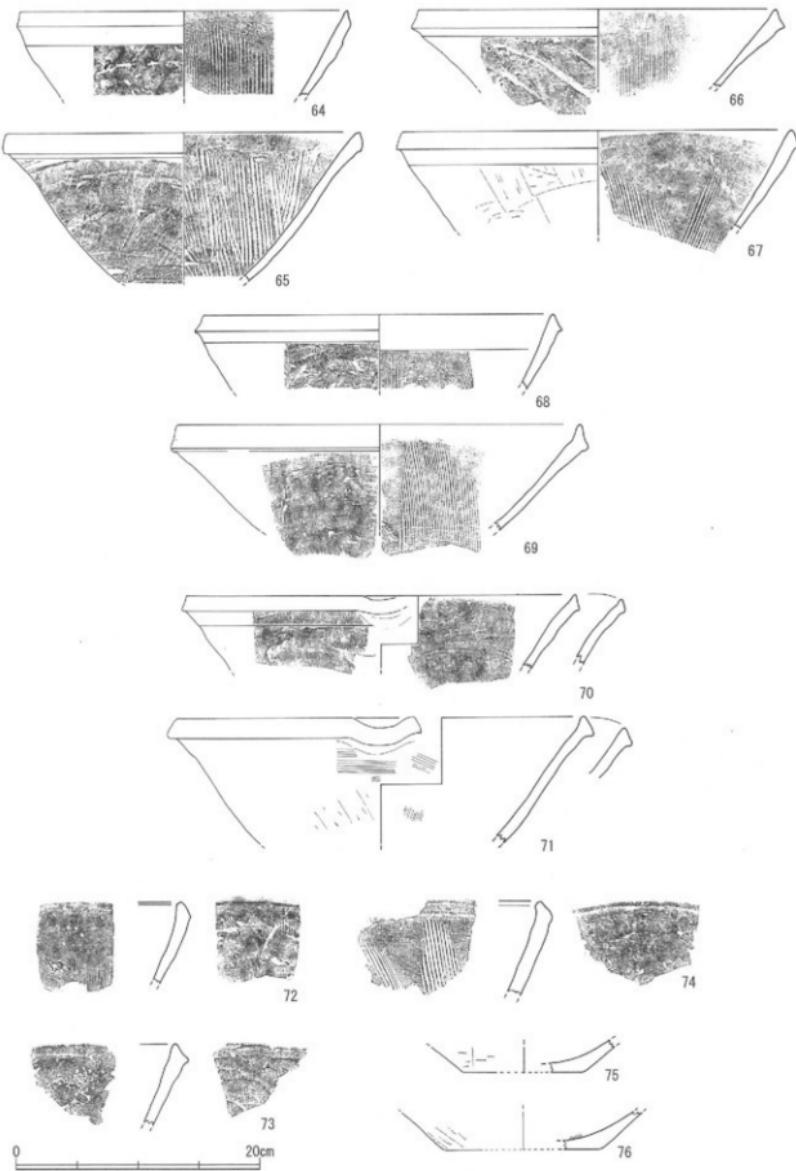


図20 出土遺物3

cmを測る。10cmまでの小型品と10cm以上の大型品に分かれる。全体的に調整は摩耗のため観察しづらいが、外面の指オサエ痕は認識できるものが多い。口縁部の形態では、L字状に真っ直ぐに立ち上がるもの（図19-33）、内湾するもの（図19-30）、斜めに真っ直ぐ立ち上がるるもの（図19-27）、外反するもの（図19-29）に分かれる。この中で外反するものが最も多い。また端部は丸くおさめるものがほとんどであるが、口縁端部のナデ調整により段を有するもの、肥厚しているものなどが見られる。底部については欠損しているが多いため明瞭でないが、26のように底部中心が内側に隆起したヘソ皿と呼ばれるものも存在する。また55には内面に漆の痕跡が見られる。

#### 瓦器皿・瓦器椀（58～63）

58は復元口径8.0cm、残存器高1.25cmを測る。内面から外面口縁部まではヨコナデ、底部には指オサエ痕が残る。62は断面三角形のやや退化した高台が取付く。口縁部は欠損していない。内面には平行暗文、外面には指オサエ痕が残る。59・61・63は高台が退化し、消失している。復元口径は10cm前後、残存器高2.5cm前後を測る。外面のヘラミガキは省略され、内面のヘラミガキもほとんど見られない。60は退化した高台らしきものが残る。内面にはヘラミガキが見られる。

#### 瓦質土器（64～99）

64～68、72～76は擂鉢である。復元口径26.2～33.2cm、残存器高6.0～12.3cmを測る。外面はヘラケズリのみのものやヘラケズリのち指ナデを施しているものがある。内面には擂目を施しているが、太いもの（図20-65）や細かなもの（図20-69）が存在する。口縁部形態については、端部が肥厚せずに鋭角になるもの（図20-64）、端部が外側に肥厚するもの（図20-66）、端部が上下に肥厚するもの（図20-69）、端部が内側に立ち上がるものの（図20-74）がある。

70、71は片口鉢である。70は復元口径31.8cm、残存器高6.0cmを測る。内外ともヨコナデが施されている。71は復元口径33.2cm、残存器高10.5cmを測る。外面口縁部付近はヨコハケ、体部にはヘラケズリが施されている。両方とも色調は灰白色を呈する。

77～90は羽釜である。復元口径18.5～28cm、残存器高5.4～8.4cm、復元鍔径26.8～36.1cmを測る。口縁部はハの字状に内傾しながら立ち上がり、端部は面をもつ。外面には沈線あるいは稜線によって階段状に段が生じている。体部外面には横あるいは斜め方向のケズリ、内面にはヨコハケを施すものとヘラケズリを施すものがある。体部の形状などは接合個体が少なく判然としない。鍔は水平かやや上向きに立ち上がり、鍔先を丸くおさめるものと面をもたせるものがある。色調はやや黒っぽい灰色を呈するものが多いが、薄い橙色を呈するものもある。

91～96は火鉢である。91は口縁部の一部のみ残存する。外面には菊花文がスタンプされている。93も口縁部の一部のみ残存する。口縁端部は幅約2.0cmの平坦面をもち、口縁端部より2.5cm下の外面には幅約1.0cmの突帯を有する。94は方形の火鉢で底部と脚部の一部が残存する。脚部は猫足になっている。95も口縁部のみ残存する。端部は幅約4.0cmの面をなし、内側に直角に張り出す。口縁部外面には2条の突帯とその間に雷文スタンプが巡らされている。96は火鉢としているが、風炉の可能性もある。

97～99は壺である。97は復元口径26.8cmを測る。頸部はなく、端部をわずかに外反する。外面にはタタキが端部まで施されている。内面にはハケメが見られる。98は復元口径37.6cmを測る。口縁部は短く外湾する。外面には細かなタタキが施されている。99は復元口径42cmを測る。口縁部は肥厚し玉縁状を呈する。外面には端部付近までタタキが施され、内面にはハケメが見られる。

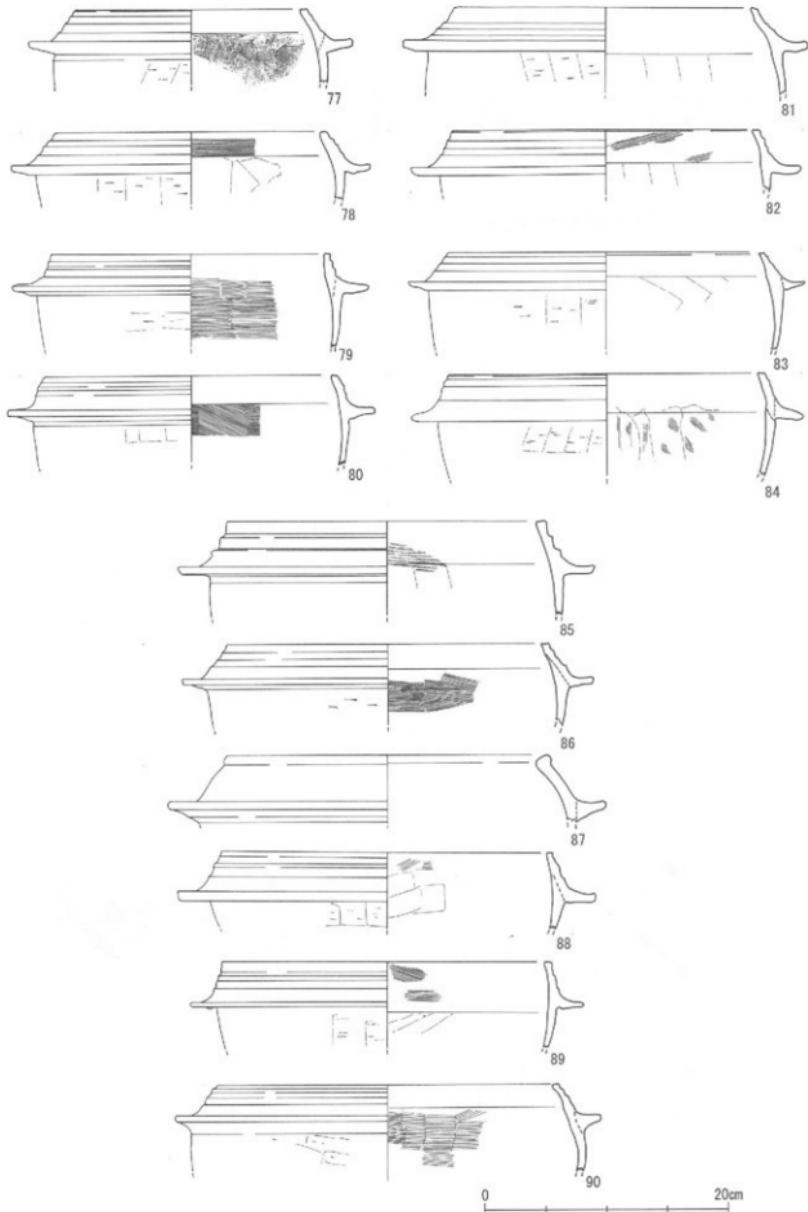


図21 出土遺物4

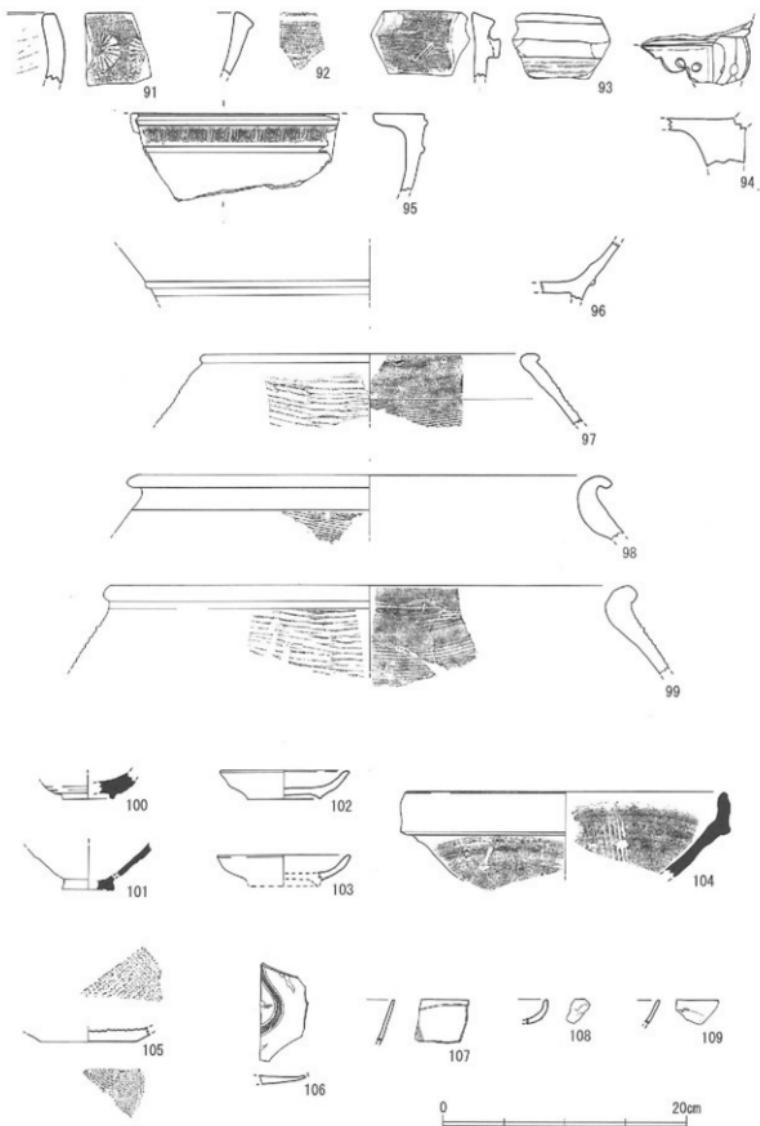


図22 出土遺物5

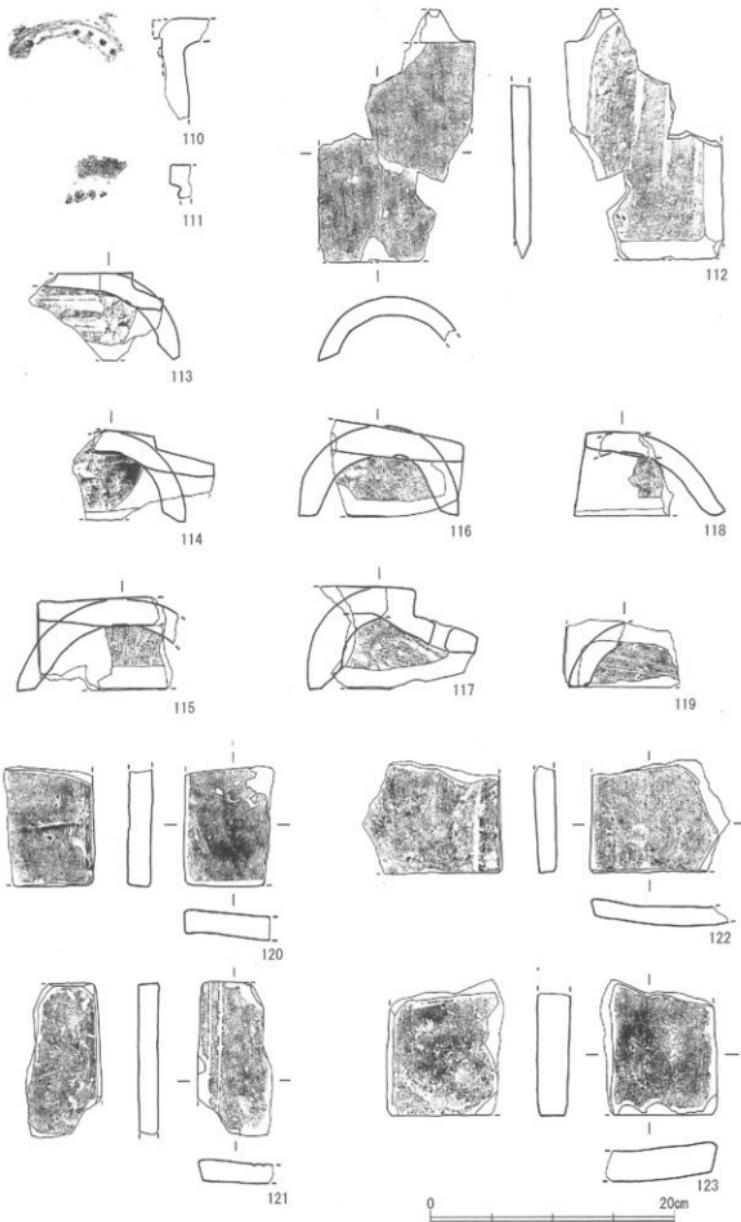


図23 出土遺物 6

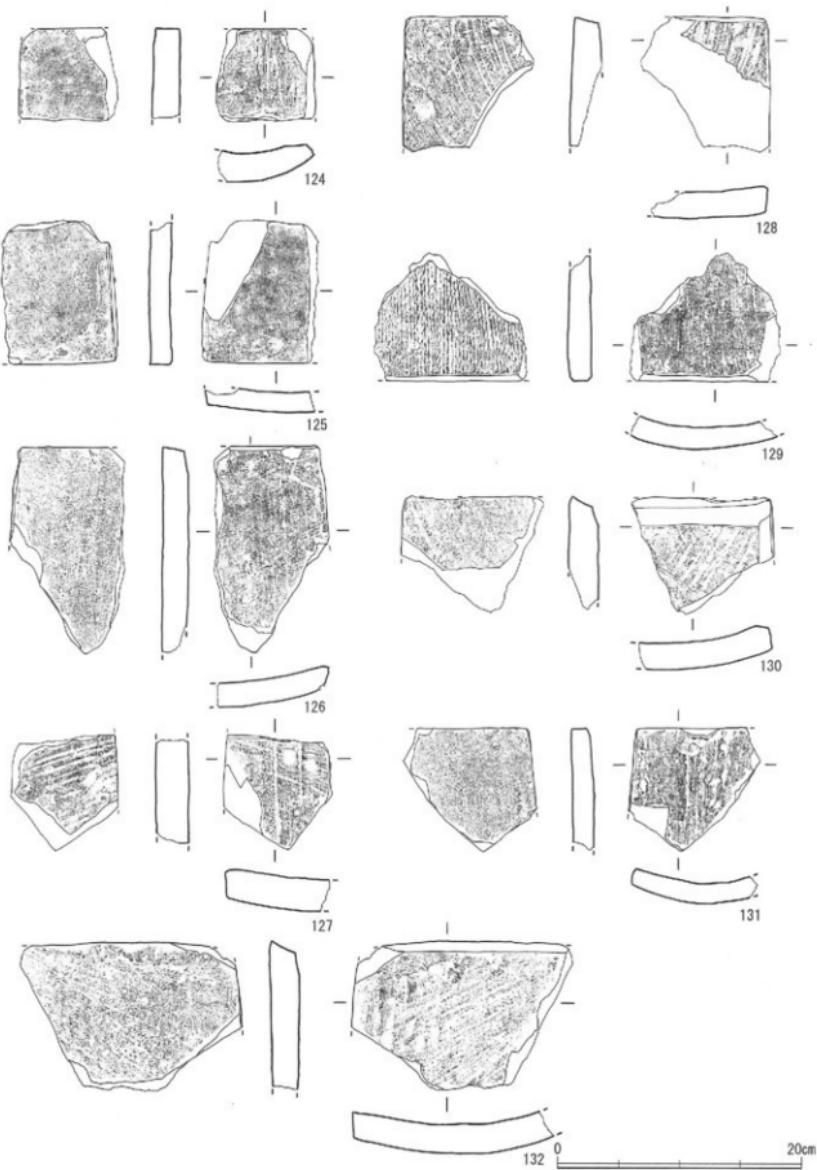


図24 出土遺物7

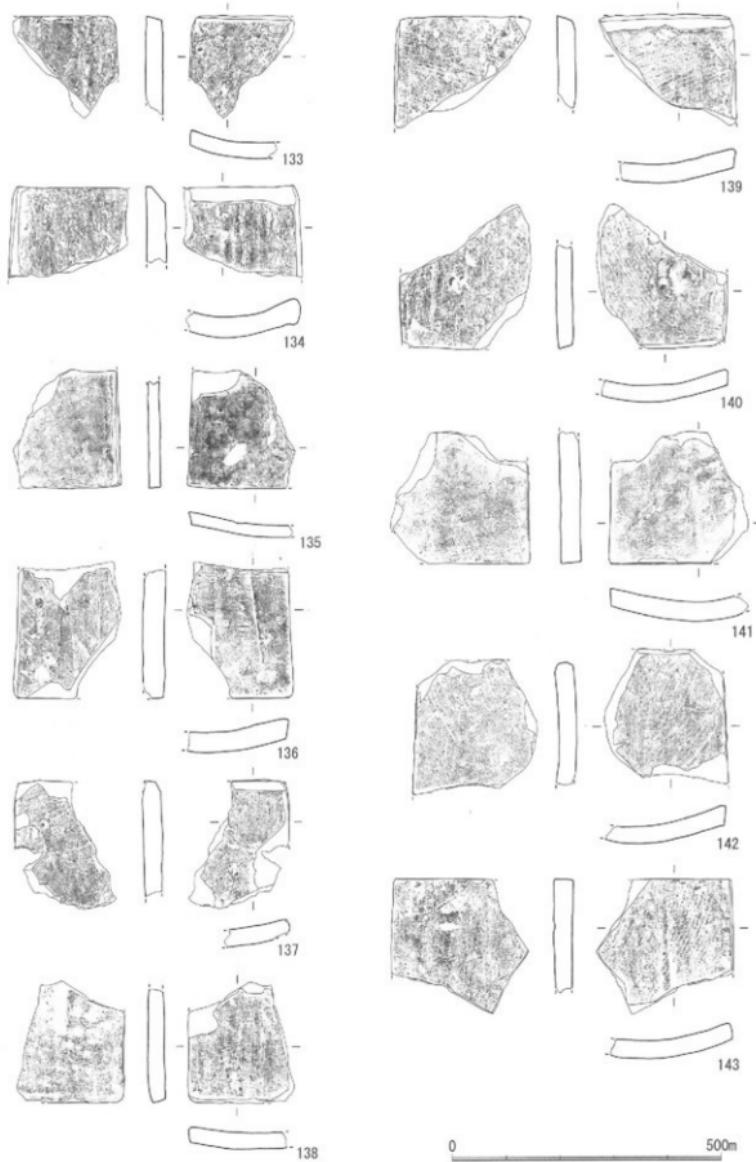


図25 出土遺物 8

## 陶器・磁器

100は美濃・瀬戸系の茶碗と考えられる。短く張り出した高台をもち、外面底部は回転ヘラケズリが残る。内面には濃い灰色の釉がかかる。101は天目茶碗である。内面及び外面の底部付近まで鉄釉がかかる。高台は疊付と高台内の段差がほとんどなく、わずかに高台内を削り出して疊付部分を表現している。102・103は瀬戸小皿である。内外面とも黄褐色がかかりうぐいす色を呈する。高台は高台内を削り込んで作り出している。また高台内は重ね焼きによるものと考えられる溶着によって剥離した痕跡が見られる。内面には釉薬を塗布後、別の釉薬を見込み部分に垂らして青白色の文様を作り出している。103も102と同様の形態と考えられるが口縁部の一部のみで判然としない。これら陶器は同一の土坑から発見され、特に102は土坑底に表向きに据えられていた。104は備前焼鉢である。復元口径26cm、残存器高7.0cmを測る。口縁部は体部から垂直に立ち上がり端部は丸くおさめる。内面には摺目が残る。色調は内面及び外面体部はレンガ色、口縁部外面は赤紫色を呈する。105は瀬戸おろし皿である。底部の一部のみ残存する。底部には糸切痕が残る。内面見込み部分には格子状の切り込みを入れおろし状にしている。106は白磁皿と考えられる。見込み部分に龍が彫り込まれている。107は青磁碗である。外面には文様は無く、内面に線状の文様が入る。108は瀬戸焼と考えられるが小片であるため判然としない。外面には緑色の釉がかかり、釣針状の文様が見られる。109は染付である。小片のため器形等はわからない。

## 瓦

110・111は軒丸瓦である。どちらも外区に連珠を配する。小片や破損が大きいため全体像はよくわからない。112～119は丸瓦である。112～114・117には玉縁が付く。112は最も残りの良い資料で、長さ21cm、幅は広端部で復元値13cmを測る。漆黒に燃された色調で、凸面には丁寧にヘラミガキが施されている。凹面縫側部は綺麗に面取りされ、布目痕及びヘラケズリの痕跡が確認できる。また玉縁付近では布を絞ったような痕跡がうかがえる。113は形態や調整、焼成具合など非常に酷似していることから同じ工人集団によって作製された製品と考えられる。117の玉縁には、瓦を固定させる釘穴が開けられている。120～143は平瓦である。破片ばかりで全体像が復元できる資料はない。凹面側端面の面取りを丁寧に施しているものが多い。凸面には網目タタキが施されているものとタタキのちナデ消しされているものがある。136のように明瞭に網目タタキ痕跡が残るものは少なく、不明瞭なものや摩耗により確認できないものがほとんどである。ただ119や123のようにタタキのちナデ消しているものも存在する。凹面には布目痕のはかコビキ痕が残るものがある。なかには火を受けた痕跡が伴うものが存在していることから、集落自体が戦火に巻き込まれた可能性も考えられる。

## まとめ

今回の調査によって、15世紀を中心とする遺物が出土した。これは大黒寺を中心とした門前町的集落が栄えた時期と考えられる。これまでの調査で中世後期に属する遺構や遺物が最も多いことからも証左していると言える。

ただ今回の調査で注目すべきことは、古墳時代の遺構が見つかったことと言える。これまで古墳時代の須恵器などの遺物が発見されていたため、この時期に生活基盤が形成されたのではないかと推測はされていたが、遺構自体は確認されていなかった。本調査で、掘立柱建物及び溝が発見されたことから、古墳時代後半には集落が形成されていたことが判明した。今後、古墳時代の集落実態の資料が増加するであろう。

## 峯ヶ塚古墳（第13次）

峯ヶ塚古墳は羽曳野市轄里2丁目に所在し、閉鎖的な陵墓の多い古市古墳群内にあって墳丘に立ち入ることのできる数少ない前方後円墳として、その恒久的な保存のため昭和49年に国史跡に指定された。その後、古墳自体の個別の重要性もさることながら、各古墳の構成やエリアを含めた古市古墳群全城の重要性から、平成13年1月29日には古市古墳群全体を構成する峯ヶ塚古墳として「古市古墳群」の名称を付して、史跡地として名称の変更が図られた。

また、世界文化遺産の登録を目指す「百舌鳥・古市古墳群」の構成資産の一つとなっている。羽曳野市では街づくりの一環として、古墳の構造や当時の社会を理解する上で欠くことのできないこの貴重な古墳を復元・整備する計画を立案し、継続した発掘調査や整理作業を実施し、これまでに12次に及ぶ発掘調査を実施しており、墳丘や堤の規模や構造、盛土工法など多くの調査成果を得ている。

### 古墳の位置と環境

峯ヶ塚古墳は古市古墳群の南西部に位置し、周辺には仁賢天皇陵古墳・清寧天皇陵古墳・日本武尊白鳥陵古墳がある。これらはやや東に距離をおく安閑天皇陵古墳と合わせて、西面し主軸を東西方向に置く前方後円墳として古墳群の中でも一つのグループを成している。また、その墳形や確認された埴輪の特徴などから、これらのグループは古墳時代中期後半から後期前半に築造されたものと考えられ、応神天皇陵古墳を中心とする一群とは築造時期やエリアを異にしている。

隣接する古墳としては、江戸時代の絵図に仁賢天皇陵古墳との間に水塚古墳（前方後円墳）や久米塚古墳（大型方墳）が描かれている。このうち、水塚古墳は平成11年度の宅地造成工事に先立つ確認調査の結果、絵図に記された通り西面する前方後円墳であることが判明した。全長47mの規模と復元され、周溝は検出面で幅6~8mを測る。埋葬施設は既に削平され規模や形態は不明である。また、周溝内から埴輪が出土するものの葺石が認められないため墳丘斜面には葺石は施されていない可能性が高い。また、出土した円筒埴輪は川西編年の第V期に相当するものが中心で、他に盾や鶴形などの形象埴輪が認められた。こうした結果から、水塚古墳は古墳時代後期初頭頃に築造されたと考えられ、南側の大型方墳であるクメ塚の存在などを考慮すると、峯ヶ塚古墳周辺は古墳群後期の変遷や終焉期を考える上で注目される地域である。



図26 周辺の遺跡分布図

一方、古墳北側には難波津から飛鳥の都へ向かう官道（後の丹比道）が往来しており、峯ヶ塚古墳が交通の要所に位置する。さらに、丹比道を挟んだ北側一帯に広がる軽里遺跡では発掘調査によって古墳時代前期の土器を埋納する土坑が數ヶ所で確認された。その性格や機能は不明であるが、古市古墳群が築かれる前段の状況を物語る遺跡であり、今後の調査成果が期待される。

地形的には、仁賢天皇陵古墳や清寧天皇陵古墳が築かれたと同じ羽曳野丘陵の東に位置し、丘陵から東へ伸びる尾根筋から一段下がった扇状地に古墳が占有している。このような開析谷の末端では丘陵斜面からの流土によって古墳の外部施設や形態を崩す恐れがあるが、谷筋を流れる水を古墳の濠に導き易いという利点があり、二重に取り巻く濠に水を溜めるには適した立地と考えられている。

歴史的な背景としては、古墳の所在する軽里が、昭和5年まで「軽菴村」と呼ばれていた。これは、村内に「かるの墓」が存在するという伝承によるもので、この「かる」は允恭天皇の第一皇子の「木梨軽皇子」とする説がある。一方、これとは別に「白鳥伝説」の主人公である日本武尊が白鳥となつて舞い降りた処に築かれた「仮の墓」が訛り「軽墓」となったとも伝えられている。現在、この日本武尊陵は「白鳥陵古墳」として、同じ軽里にある前の山古墳に比定されているが、応元（1865）年の『聖蹟圖志』には、この峯ヶ塚古墳が「白鳥陵」と記されている。

### 過去の調査成果

これまで発掘調査の結果、墳丘は現在見られるより一回り大きく、全長96mを測る。墳丘は盛土や葺石の状況から二段築成で、くびれ部の北側には造り出しを有する。南側については、溜め池の水位が下がった時にはその場所に土壇が認められたが、第11次調査によって存在しないことが確認された。また、墳頂鞍部中央には後円部から前方部に至る幅約5mの範囲に小礫が敷かれ、両側に円筒埴輪が樹立する通路状の施設があったことが確認された。

外部施設としては、南側に現存する溜め池などの範囲を内濠とし、その外側には内堤、更に外側には二重目の濠をめぐらせる。この外濠は地形の制約で場所によって幅や深さなど規模の違いはあるものの、西辺、北辺から南東部付近までその存在を確認している。しかし、第8次の調査の結果、南辺では外濠が存在しないことが確認された。

### 【古墳の規模】

〔単位：m〕

墳丘長	後円部直径	後円部高	前方部幅	前方部高	内濠幅	内堤幅	外濠幅	墓域
96	56	9	74.4	10.8	11	18	7.2~9.2	168×148

墳丘は、後円部と前方部の墳頂の比高差が現状では約1.8mを測る。後円部東端では一段目が約2.5m（標高40.0~42.5m）、二段目が約6.5m（標高42.5~49.0m）となり、後円部約9mの高さは全て盛土で構築される。一方、前方部前端では一段目が3m（標高42.0~45.0m）、二段目が約5.8m（標高45.0~50.8m）を測るが、盛土を行うベースの地山面が前方部側では後円部に比べて約2m高くなっている。これが墳丘全体での高低差となって表れている。なお、後円部ではこの盛土の変換点が石室構築と共に4段階の築造過程が復元できる。第1工程で墳丘下段部を築き、第2工程では確認された石室基礎部までの3mを盛土する。第3工程では石室天井部までの2mを築いて、第4工程で天井石を覆い墳頂部までの1.5mを盛土しており、各工程が古墳施設の構築とも関連していることが判明した。また、各工程で使用される土砂の種類も異なり、粘土質や粘土、砂質土を区別し、透水性や締まり具合などを考慮して施工している。

また、南側の堤の盛土に関しては、土台を配置してその間を埋めていく工法が明らかになった。その際には土塊を用いて丁寧に盛土を構築しており、当時の高い古墳築造技術が確認されている。

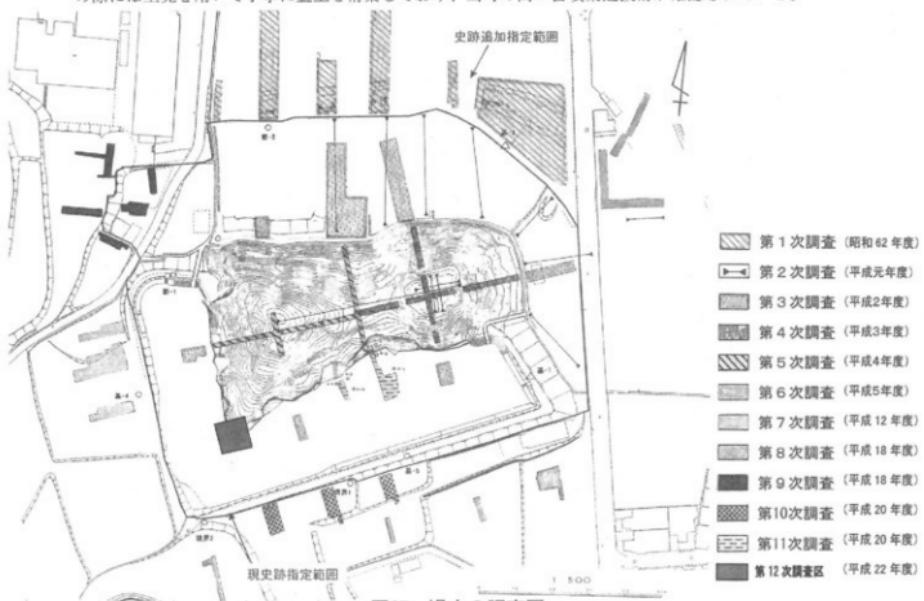


図27 過去の調査区

葺石は墳丘上段斜面の裾部分のみに施され、盛土を行なう上で崩れ易い下部を強化する目的で、斜面全面を覆う必要がなかったものと考えられる。施工は、テラス面にやや大きめの楕石を埋め込んだ後に、墳丘盛土と一緒に亜角礫をおよそ8段分となる約1m、石垣状に埋め込んでおり、石材の隙間に黄褐色系粘質土が充填されており、石材の固定に利用されている。

埋葬施設については、平成3年度に後円部墳頂で発見された石室がその築造方法や副葬品などから峯ヶ塚古墳の主体部と考えられる。盜掘で天井や壁面の石は抜き取られていたが、現墳頂より約3m下から築かれていた。石室は東西約4.3m×南北約2.2mの長方形で、石室内部の高さは石室背面の土層状態から約1.9mと復元できる。未調査部分があり不確実な点が多いが、現段階では竪穴式石室と考えられる。石棺については阿蘇産の溶結凝灰岩で、いわゆる『阿蘇灰黒』と呼ばれる黒色系のものと、『阿蘇ピンク』と呼ばれる白色系の2種類の石棺材が存在する。黒色系の破片の中に印籠蓋合せの形態をとるものが認められることから、削抜き式の舟形石棺（家形石棺の祖形）が埋葬されていると考えられる。

これまでに出土している円筒埴輪は、黒斑がなく、外面は一次調整によるタテ及びナナメのハケ目調整、内面はナデ調整が施されているものが多数を占め、川西編年のV期に相当する。ただし、一部に二次調整としてB種ヨコハケを施したものや口縁突帯をもつもの、タガの突出が高い埴輪が存在することから、V期においても古い様相と考えられる。なお、墳丘部におけるいずれの調査でも形象埴輪は確認されていないが、第7次調査・西側外濠の発掘調査で人物埴輪・腕部が出土した。この埴輪

は中世の造成土に近い層から出土しているため原位置の特定は不可能であるが、墳丘上でないことは明らかで、埴輪を伴う祭祀が外堤部に移行した時期であることを示す貴重な所見と考えられる。

一方、前方部の墳丘盛土及びくびれ部の流土から須恵器の破片が出土している。いずれも、杯蓋の小片であり全形を復元し得ないが、天井と口縁部との境目に明確な凸帯を有するものが認められる。また、西側外濠の埋土からは直立する口縁部と端部内側に段を有する須恵器杯身が出土しており、その形態や特徴から田辺編年のTK47段階とみられ、古墳築造の近い時期を示すものと考えられる。

後円部墳頂で確認された石室からは、出土遺物の総数は3,500点以上に及ぶ。これらは、被葬者を考える上で欠くことの出来ない資料であるばかりでなく、当時の技術や社会背景・交易を知る上で重要な資料である。その内容を概観すると、小片ではあるが青銅鏡の出土が確認されたのをはじめ、勾玉・白玉・管玉などの玉類、鹿角製やこれを模した木製刀装具を備える大刀など伝統的な威信財が認められる。これに加えて、馬具・盛矢具（胡蘿）・銀製刀装具・装身具（銀製垂飾付耳飾り・三叉形垂飾り・花形垂飾り・冠帽・帶金具）などの渡来系要素が強い金・銀製品の新しい威信財も多数出土している。

特に、被葬者を象徴する副葬品として大刀の一群があげられる。長さは1.2mに達し、明らかに実用を離れた儀仗の大刀である。刀装具には伝統的な鹿角製と銀板で縁を飾った木製品があり、銀製振じり環頭は5点確認され、内3点は先の楔形把頭を取り付くと共に、魚佩を伴っていたと考えられる。一方、当時大陸で盛行し装飾性や高い身分示す金銅環頭大刀を副葬せず、あくまでも「倭装大刀」という伝統品に固執している。

副葬品全般を概観した場合は、古墳時代の中期的な武器・武具の多量副葬と後期的な装飾性の高い金・銀素材を用いた副葬品の多量副葬の両方を持ち合わせており、過渡期の様相を示している。また、鉄鎌・馬具・挂甲・大刀の附属品・石棺の形態や産地などを総合的に考えると峯ヶ塚古墳は5世紀末頃から6世紀初頭に築造されたと考えられる。

### 調査の契機と経過及びその目的

今回の調査対象地は古墳の南西部にあたる。これまで、南及び西側の堤部分の調査では、盛土の状況や規模・構造が確認されているが、堤の内側法面については調査を実施したことなく、その位置や規模・構造が不明であるために、その状況を確認するために調査を実施することとなった。

これまでの経過を踏まえ、大阪府教育委員会と調査位置などを協議後、平成25年9月19日付け（羽生教社第832号）で史跡名勝天然記念物現状変更許可申請書を提出した。これについて、同年10月18日付けで文化庁から許可を得たことから、輕里地区水利組合の協力より12月11日よりため池の水を放流して、調査対象範囲の土壤を乾燥させた。

その後、平成26年1月20日より調査を開始し、3月25日に遺構を養生して埋め戻しを行い、現状変更を完了させた。この間、確認された遺構を公開するため3月8日に現地説明会を開催し、約100名の参加を得た。



写真1 現地公開の様子

## 調査成果

調査は、現ため池の土手から濠底と推定されるため池底部に及ぶ位置を対象に5箇所の調査区を設定し、まず泥土などを重機で除去した後、濠や堤の内側法面としての遺構若しくは地山面まで人力で掘削を行い、断面及び平面を精査した。

なお、現地調査後に概要を順次報告してきたが、整理作業・検討によって明らかとなった点などはこの報告をもって以前のものを訂正・修正する。



図28 調査位置図と墳丘裾・堤の復元図（過去の調査区を含む）

### 【第1調査区】

西側土手上から内側に設定した調査区で、上面では幅3.1m×長さ4.3mの範囲としたが、一部東に1.5m、西に約3mを延長した。なお、この調査区は墳丘の主軸上にあたり、平成2年度・5年度の墳丘側の調査区と、平成13年度の堤及び外濠側の調査区の間に位置する。

ため池の土手は、現代の盛土（約1.6m）によるもので、下層にはビニールなどの廃棄物が確認された。また、地山面に近い（2）では近世の瓦や茶碗が見つかっており、近世に大きく掘削を受けたとみられ、古墳築造時の旧地表面及び堤の盛土は確認されなかった。なお、平成13年度の第2調査区では、本来堤の位置に当たる範囲においても中近世の造成土が確認されており、同様の状況が確認されている。

地山面は調査区西端では標高42mで、緩やかに東に傾斜し、西から約5mでは標高40.3mとなり、長さ1.5mの平坦面を有する。さらに東端から1.8mの位置からは東へ下降し、調査区東端では標高39.3mに至る。平坦面以東の地山面は緑灰色粘土及び砂質土で堅くしまった層である。また、この下降す

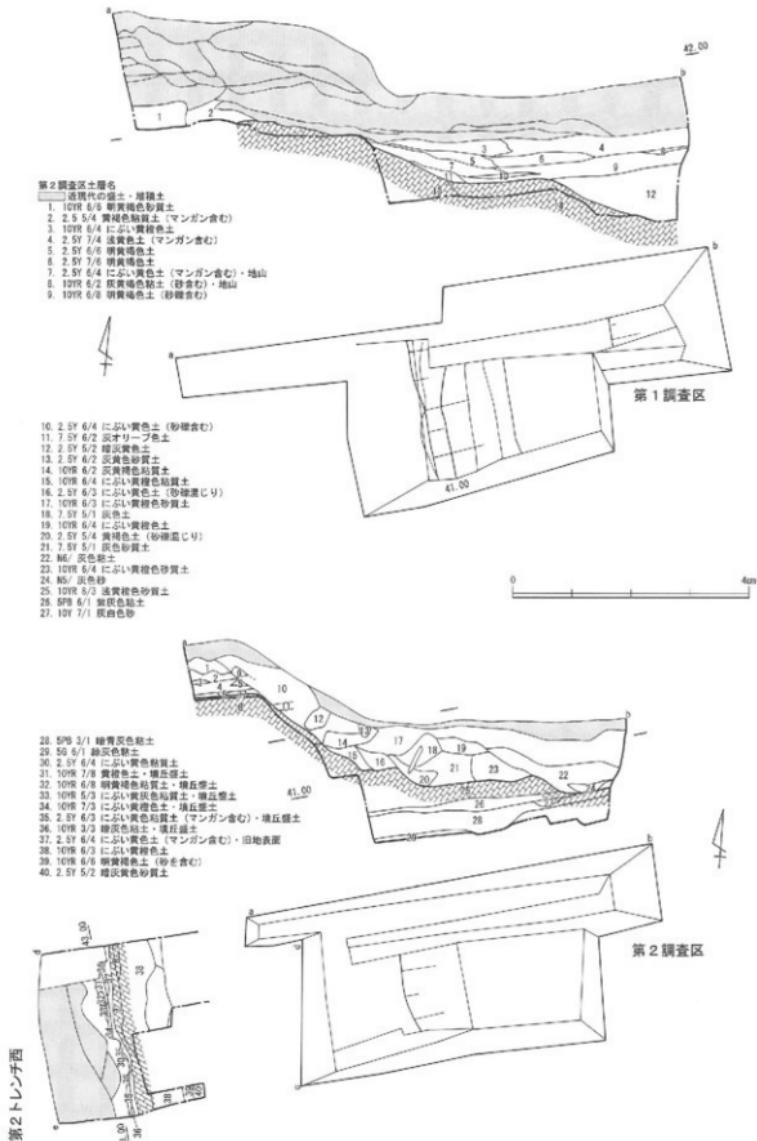


図29 第1・2調査区平面及び断面図

る付近の埋土（12）の下層からは転落した葺石や円筒埴輪の破片がまとまって確認され、本来の濠に近い部分であると考えられる。

一方、対峙する墳丘側の地山面の濠底からの墳丘への変換点は、この調査区東端から約10mの位置で、標高は38.9mであることから、堤の内側法面の変換点は調査区外に位置するものと考えられる。

#### 【第2調査区】

第1調査区の南約9mに位置し、西側土手上から内側に設定した調査区で、上面では幅3m×長さ5mの範囲で調査を行った。その後、濠の底部を確認するために、一部東側に1.2m延長した。なお、この調査区は、堤と外濠を確認した平成13年度の第3調査区の東側2.5mに位置する。

ため池土手の約1mは現代の造成盛土である。現地表面下1.2~1.4mで古墳築造時の旧地表面が現れる。紫灰色粘土層（37）で、東西方向はほぼ水平に堆積するが、西壁では中程から南側へ若干低くなっている。この旧地表面は標高およそ42.8mで、この層の上には、厚さ0.05から0.1mと叩き締められた、粘土層と粘質土が堆積（31~36）しており、その状況から古墳本来の堤の盛土と考えられ、南側堤や墳丘の盛土で観察されたものと同じ状況を示していた。

平成13年度の第3調査区東端で確認された地山面は標高43.2mとほぼ同じレベル値である。なお、そこから西には地山が上昇し、外濠の内側では標高42.9mと0.7mも高くなっている。

一方、土手下付近の地山面では長さ1.2mは平坦面を有するが、以東は傾斜50度と急に下降しており、近世に「新池」として現ため池を築くための掘削やその後の浚渫の際に大きく削られたものと思われる。調査区中程では標高40.8m付近で水平面を保つが、調査区東端から1.5m付近では掘削を受けた状況で下降し、東端では標高40.2mとなる。この付近では転落した葺石が確認されることから濠に近い部分ではあるが、第1調査区や平成2年度の濠底のレベルからは約1.3mと高く、更に東側が本来の濠底の変換点になるものと思われる。

旧地表面下はすぐに地山面（7・8）となり、以下は古墳築造以前に一帯が谷地形で、西側の丘陵側から流れ込んだ自然堆積とみられ、粗い砂や細かい砂、砂と粘土層の互層を呈している。特に、標高40.2m付近では均質に水平堆積する黒灰色粘土層（28）は厚く、一時滞水していた状況を示している。この下層では他の調査区で確認されるものと同じ緑灰色粘土の地山面（標高40m）がほぼ水平に堆積することが確認された。

また、ため池側へ崩落した土砂の中にはこの盛土が塊となって転落している部分（23）も確認された。おそらく、倒木などで根が上がりた後、土砂の塊が滑ったり、盛土下部の水際が浸食され、上部が崩落したりしたものと考えられる。

#### 【第3調査区】

第2調査区の南22m、第4調査区の西5mの位置で、西側土手の南寄りに設定した調査区である。当初、上面では幅3.3m×長さ8mの範囲で調査を行ったが、その後、南側へ1.5mの幅で拡張し、地山の高まりの続きを確認することとした。なお、調査開始直後に土手盛土が崩落したため、堤側の地山面や盛土を確認する調査が不可能となった。

土手上では現地表面下約1.3m、ため池部分では0.4mまでは近現代の盛土や堆積層である。

調査区南側の断面観察では、地山面は西側の土手付近では標高41.9mで、調査区の中程では41.1m、東端では40.6mの値で、1.3mの比高差しかない。しかし、調査区の北東側では標高は約39.6mと低く、南西側と4mの範囲で比高差は約1.5mを測る。また、当該地は推定される濠外側の法面となる部分

ではあるが、明らかに濠の中に地山を掘り残した高まりが認められた。

なお、高まりの北側面では所々では大きく掘削され凹みが認められるが、付近より近世の瓦や土器などが見つかることから、江戸時代に行われた大がかりな凌轢などによる掘削が及んだものと考えられる。

調査区の東側で高まりから下降した地山付近には葺石の転落したもののがいくつか散見された。

#### 【第4調査区】

第3調査区の東5m、南側土手の西寄りに設定した調査区で、上面では幅3.7m×長さ6.5mの範囲で調査を行った。この調査区は、墳丘南西隅の裾部分の確認調査を行った平成22年度の調査区の南約3mに位置する。

ため池の土手は現代の盛上がり約2.5mの厚さで積まれており、深い範囲までが新しい造成土や松杭などが打ち込まれており、水利組合役員が昭和40年代に工事をしたとの話に合致する。ため池内でも約0.8mまでは現代の堆積層で、下部からは廃棄物も確認された。

調査区の南端では、標高40.4m付近で緑灰色粘土の地山面が確認され、約1.4mの長さが平坦面を呈しており、人為的な平坦面と見られることから江戸時代の凌轢などが及んだものと判断される。また、以北の地山の標高から本来は南側に向かって上昇するものと思われるが、調査区の範囲では堤への上昇は認められなかった。一方、地山面は平面的には調査区の南東隅から北西に向かって傾斜し、約0.5

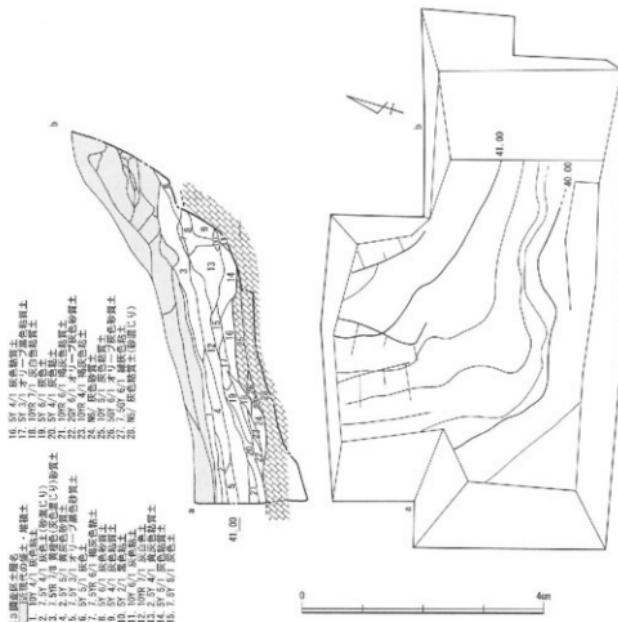


図30 第3調査区平面及び断面図

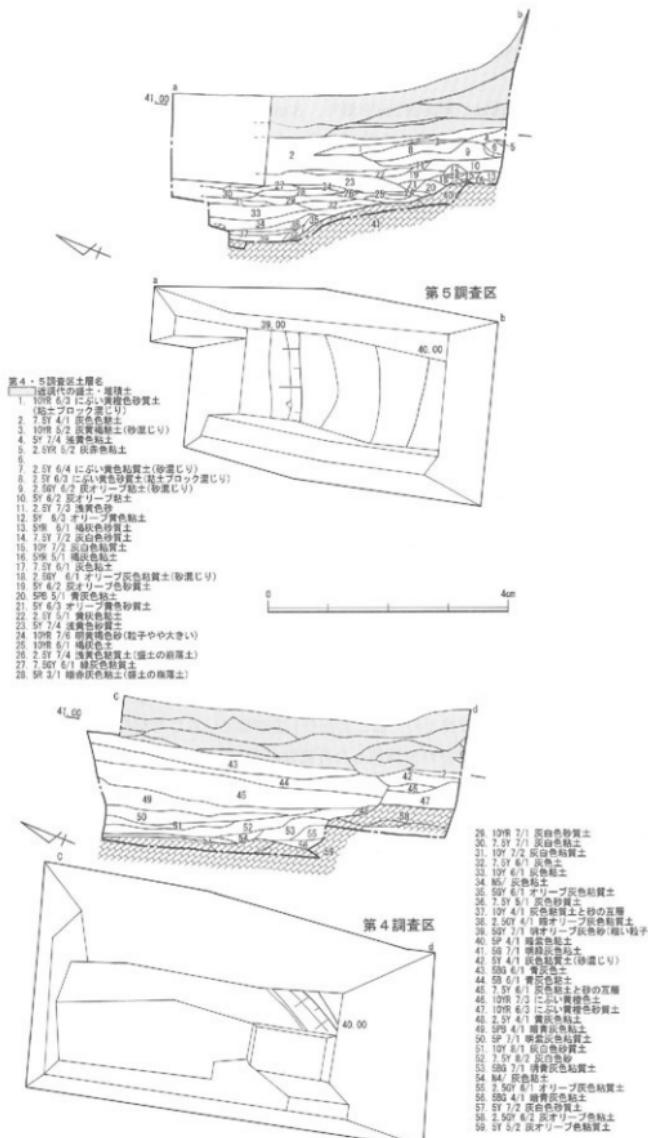


図31 第4・5調査区平面及び断面図

mの比高差を有しており、付近からは転落した葺石が出土することから濠内に相当する部分と考えられるが、この傾斜や方向が本来の堤の内側法面の痕跡であるかどうかについては、現調査区の範囲では判断できなかった。

一方、調査区北端の地山面は、標高39.2mを測り、3mの距離を置く平成22年度の第2調査区で確認された濠底の標高が39.5mであることから約0.3m高くなることとなり、南辺の濠底が南に向けて上昇する傾向を示すことになった。なお、調査区中程以北の地山面の下では粗い砂層が水平堆積しており、第2調査区と同じように古墳築造以前の自然堆積層の可能性が考えられる。

#### 【第5調査区】

第4調査区の東8m、南側土手に設定した調査区で、上面では幅3.2m×長さ5mの範囲で調査を行った。その後、濠底を確認するため、東壁沿いに北側へ一部0.8mの長さを延長した。なお、この調査区は、平成20年に古墳南側の堤の施工方法などが良好に確認された調査区の北2.5m、平成22年度に南側の埴丘裾や濠底が確認された第1調査区の南3mに位置する。

ため池の土手は第4調査区と同様、現代の造成盛土が約2.6mの厚さで積まれており、西側では地山面にまで達している。また、土手及びため池底部分の約0.8~1.3mの厚みは現代の堆積層である。

調査区の南端では標高40.2mの位置で紫灰色粘土の地山面が現れ、北側へ向かって徐々に下降する。調査区北端から2.1m南の位置ではこの地山面が標高38.9mとなって、以北はほぼ同じレベルで平坦面を有する。このレベルは、平成22年度の第1調査区で確認された濠底と同じ値であり、前方部南側の濠底を追認することができた。また、転落した葺石や埴輪が出土する層（34）などから、東断面図の32~39は濠の埋土であると考えられる。

一方、堤内側法面の変換点は調査区北端から2.1m南の位置で、本来はここから傾斜をもつて直線的に法面が地山を削り出したり、丁寧な盛土を施して堤を築いたと考えられるが、他の調査区と同様に江戸時代の浚渫等で掘削されているため、調査区内では堤本来の内側法面は認められなかった。

さらに（37・38）は黄色系や灰色系の粘質土の中に紫色の粘土ブロックなどが含まれている。これは堤側の調査で確認された丁寧な盛土の一部と土色や土質が似ていることから、濠がある程度埋まつた段階で、堤側から人為的に整地されて堆積した可能性が考えられる。同様に、（21）は黄色系の粘質土が塊で堆積しており、堤側の盛土が崩落したものと考えられる。

#### 出土遺物

5箇所の調査区からは、円筒埴輪をはじめ、須恵器、土師器、瓦器椀や土師質小皿、葺石などがコンテナ約17箱分出土している。埴輪を中心に図化可能なものを掲載し、概要を記す。

##### 円筒埴輪（1~24）

大きさについて、体部外径の平均で38cmとやや大きいものと、平均26cmと小振りのものと2つのタイプが認められ、スカシは確認できるものは全て円形である。外面の調整は一次調整のみの継若しくは斜め方向のハケメ調整で、器壁が移動するほど強く施されたもの（19・20）や丁寧に施されたもの（23）が認められる。ハケメは6~7本/cm程度の細かなもの（5や14など）と、4本前後と粗いハケメ（19・22）のものも認められる。内面の調整はナデによるものが多く、外面と同じ工具によるハケメ調整を施すもの（9・10）も認められる。

口縁部は、端部をナデによって強く摘み出し、内外面を強くヨコナデするタイプが多く、過去の調査で確認された外面に口縁突部を貼付けるものは確認されていない。底部径は25cm程度のもので、

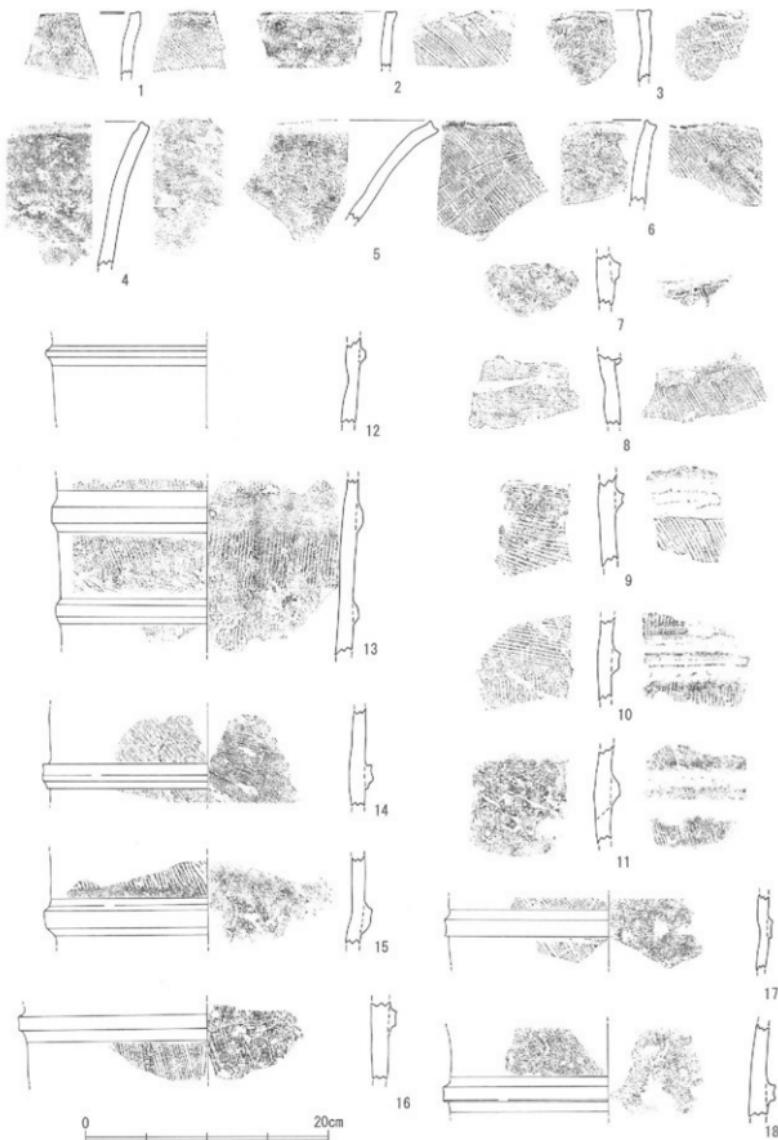


図32 出土遺物・埴輪（一）

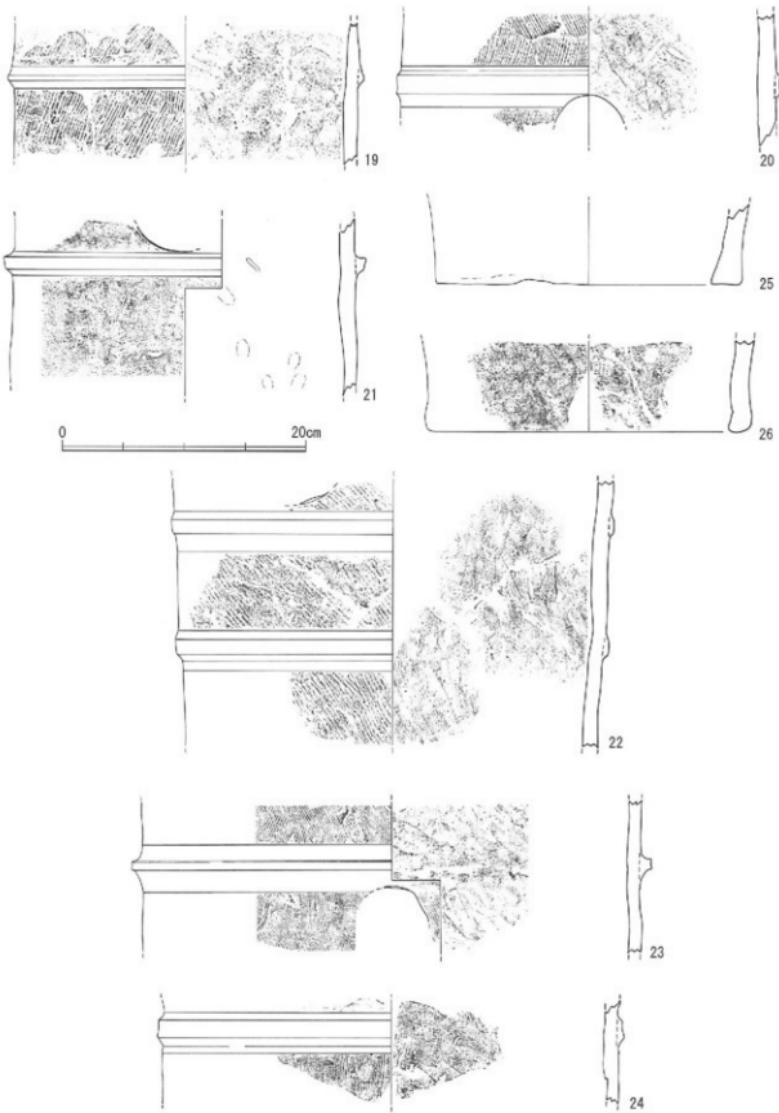


図33 出土遺物・埴輪（二）

内外面ともナデ調整によって仕上げる。

タガは突出度の高く断面が台形を呈するもの（23）と、突出度が小さく扁平なタガを貼付けた形骸化したタイプのもの（19・22）が出土している。焼成は堅緻な須恵質の埴輪と、軟質な土師質の2つのタイプが共存するが、量的には後者が多い。

5は朝顔埴輪の口縁部分で外反気味に開き、口縁近くで更に開く端部を有し、内面は丁寧なナデ調整で、外面はナナメハケ調整の後、3条の線刻を施す。

これら出土した埴輪を概観すると、「川西編年第V期」の様相を呈しているが、タガが形骸化するなど新しい様相もあり、これまでの出土資料と同様である。なお、今回の調査では形象埴輪は確認されていない。

#### 土器類（27～32）

27は須恵器杯身で口径10cm・残存高2cmの大きさで、扁平な底部から上外方に内湾して立ち上がり口縁部を有し、立ち上がりは短く、内側に直線的に傾斜する。端部は欠損している。受部はほぼ水平に外方にのび、口縁との間には1条の極浅い凹線が認められる。底部の一部に回転ヘラケズリが認められるが、それ以外は回転ナデ調整である。28は須恵器の甕の口縁部である。復元口径24cm・残存高3.3cmの大きさで、上外方に大きく外反して開く口縁部を有し、端部はナデで丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

29は土師質小皿で、復元口径9cm・残存高2cmを測る。直線的に上外方に開く口縁部を有し端部はナデで丸くおさめる。内面及び外面の口縁部付近はナデ調整を施すが、外面の口縁部の下は未調整で指圧痕が残る。30は瓦器碗で、復元口径13cm・残存高3cmの大きさで、内湾気味に開く口縁部を有し、端部はナデで丸くおさめる。外面の口縁部はナデ調整を施すが、その下は未調整で指圧痕が残る。内面はナデ調整の後に施した太い暗文が認められ、焼成は堅緻である。

31は土師質羽釜である。31は復元口径22cm・残存高4.8cmの大きさで、内湾気味に立ち上がる口縁部を有し、端部はナデで丸くおさめ、外面には三段の段が認められる。鈴は水平に取付くが、端部はわずかに上向く。32は瓦質の羽釜で、復元口径23.2cm・残存高4.4cmの大きさである。やや内傾して直立気味に立ち上がる口縁部を有し、端部はナデで方形状におさめる。口縁部外面には三段の段が認められるが、摩耗によって段差が不明瞭である。内面の口縁部付近はハケ調整の後にナデを施す。外面はナデ調整を施し、鈴は強いナデ調整によって水平に取付けている。

33は土師質の擂鉢の底部である。底部径は13cm・残存高2.5cmを測る。水平な底部から、上外方に直線的に開く体部を有する。外面はヘラケズリを施し、内面には残存部全面に擂り目が明瞭に施されている。

#### 瓦類（34～40）

34は丸瓦で、凹面には平行のコビキ痕が認められ以外は、表面は摩耗のため調整等は不明である。

35は平瓦で、厚みは1.6cmを測り、凹面は布目、凸面には繩目が認められる。また、凸面の側面が面取りを施す。36の平瓦は厚み1.5cmで、凹面は布目の後、一部ナデ調整を施す。凸面も繩目タタキの後、一部をナデ調整によって繩目を消している。焼成は良好で灰色の堅緻なものである。37の平瓦は2.1cmとやや厚く、胎土は長石などやや粗い砂粒が認められる。凹凸とも摩耗が著しき調整は不明である。38は平瓦の隅部で、厚みは1.8cmを測る。両面とも摩耗によって調整は不明である。側面の両面とも面取りを施し、側面が0.8cmと薄く仕上げる。また、角も切取り多角に成形している。39の平瓦は残存部で幅13.5cm・長さ11.5cm・厚み2cmを測る。凹面には幅2cmの木型の凹み痕とハナレ砂が認められ、端部側のヘラケズリによる面取りを施す。凸面はナナメコビキ痕とハナレ砂が認めら

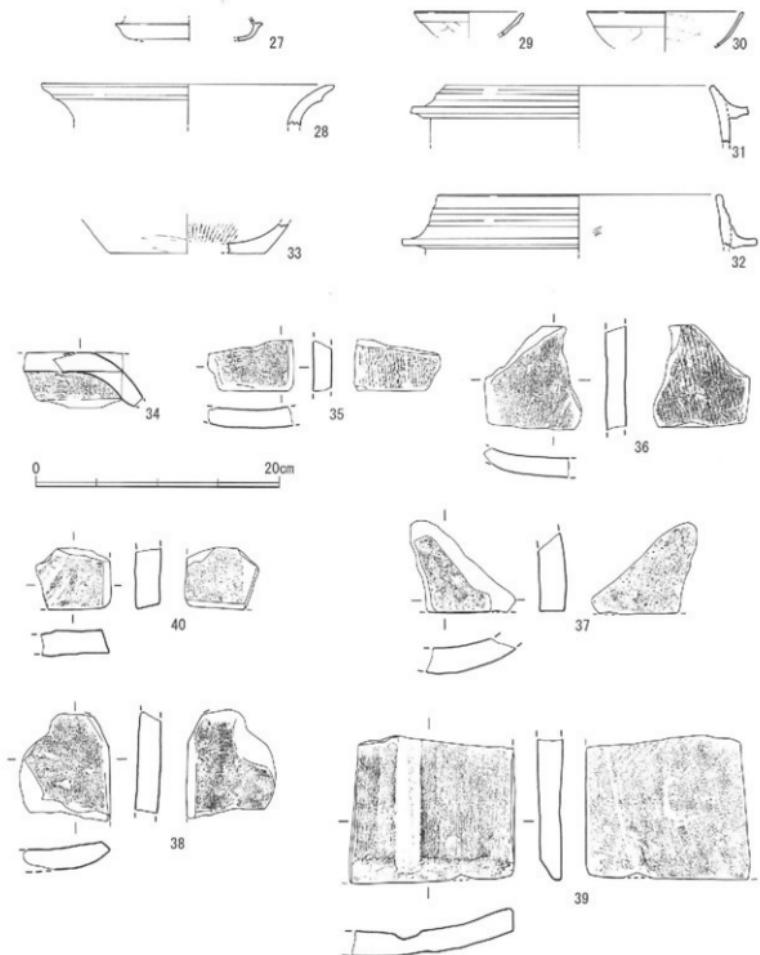


図34 出土遺物・土器と瓦類

れる。

40は小片で、厚みは2cmである。凹面には刻み目状の凹凸が残る。凸面は平滑で、表面にはハナレ砂が認められる。側面や端面はヘラケスリで成形されている。反りが認められないことから壇の可能性も考えられる。

41～44は墳丘の裾部で、減水した際に採取された円筒埴輪である。墳丘上に樹立していたものが崩落したものと考えられる。

41は口縁部で、端部は内側に拘まみ出し、上面はナデで平坦に成形する。外面はハケ調整の後、端部付近をナデ調整を施す。42の円筒埴輪は須恵質の堅緻なもので、外径24cm・残存高6.5cmである。外面は縦方向のハケ目（5～6本/cm）で、内面は縦方向のハケ調整の後、タガの貼付けの際の指厚痕が認められる。タガは高さ0.7cmのM字状のしっかり良好なものである。

43・44は土師質の円筒埴輪である。43は外径28.6cmで、器壁は1cm程度とやや薄い。内外面とも摩耗のため調整は不明であるが、内面には指オサエの痕が認められる。タガは低い台形で、下面には粘土の補填痕の凹凸が粗く残る。44は底部径27cm・残存高10.8cmの大きさで、外面は摩耗のため調整は不明であるが、内面には4～5cm/cmと粗い縦方向のハケ目が認められる。タガは形態化した低いものを貼付ける。

#### 石器（45～47）

いずれもサスカイト製の石器で、固化した他に、未製品や剥片などが数点が認められる。

45は長さ2.5cm・幅5.7cm・厚み1.0cmを測る。側面の一部には原面を残す。ローリングにより、稜線がやや滑らかで、黒色を呈する新しい割れ面が認められる。46は長さ6.5cm・幅7.7cm・厚み1.65cmを測る。上面には数点の二次加工痕が認められる。47は長さ5.45cm・幅4.9cm・厚み2.7cmで、片面には1/3程度原面を残す。削器か石核の可能性が考えられる。

#### まとめにかえて

今回の確認調査では、西及び南側の堤の内側法面及び濠など、遺構に関するいくつかの成果を得ることができ、過去の調査成果と併せ復元整備に必要な基本的な資料とすることができた。

先ず、西側に設置した第2調査区では旧地表面や地山面の標高が42.9mと確認されたことで、平成2年度の調査で前方部前端の濠底が標高38.9mと確認されていることと比較すると、堤側では4m、墳丘側で3.2mの深さまで地山を掘削したと計算される。両者の距離は20m以上あり、その掘削土量が相当大きく、古墳の西側周濠を巡らせるために堅い地盤を掘り切る大規模な土木工事であったことが復元される。併せて、墳丘や堤に盛上げられた土壤が当該濠部分の地山層と同じ色調や土質を呈していることから、周濠の掘削土を利用して墳丘や堤に盛土したことが改めて確認された。

次に、第5調査区で濠底の標高が38.9mと確認されたことで、対峙する墳丘側の濠底と同じレベルであり、この位置での濠底の標高が追認できた。また、墳丘側への傾斜変換点と堤側への傾斜変換点

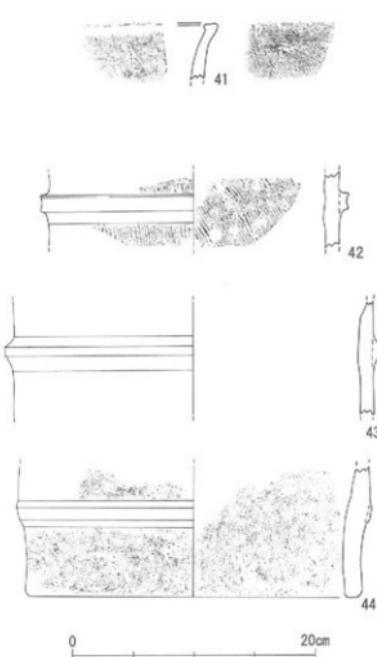


図35 墳丘据採取埴輪

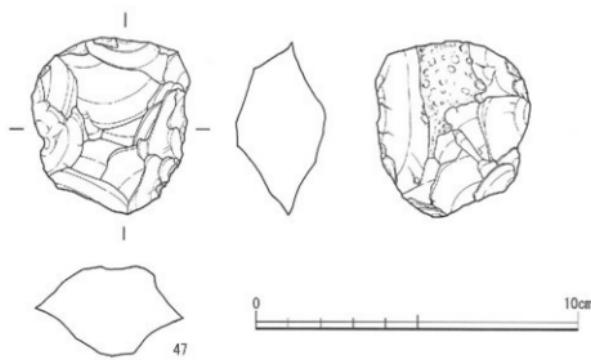
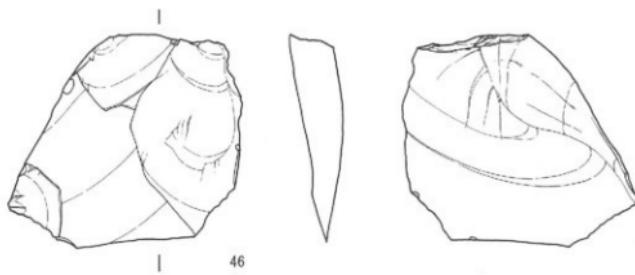
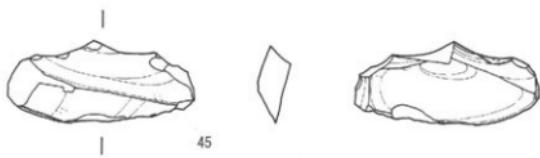


図36 出土遺物・石器

が確認されたことから、前方部南側のこの位置での濠底の幅が約7mと計測される。内濠のこれまでの調査では、墳丘主軸上の後円部東側における濠底の幅は10m、主軸に直行する後円部北側では幅8m、墳丘北側のくびれ部付近では7.2mであることが確認されている。これらの数値から、西側に向かって濠底幅が狭くなる傾向があると判断されるとともに、その標高も墳丘の主軸上で西側の前方部前端は後円部側より1.3m高くなっている。同様のことが外濠においても確認されており、その上場幅が東端では9.2mあったものが、西端では7.2mへと狭くなっている、濠底のレベルも標高差で2.7mも上昇していた。こうした状況は、峯ヶ塚古墳が西側に高い傾斜地に築かれていることが要因で、今回、検出された内濠の幅や標高も同様の状況を示しているものと考えられる。

次に、第3調査区で確認された地山面の掘り残した高まりが確認されたことである。この位置は、推定される濠の西内側法面であるはずであったが、地山を約1.5mも高く残しており、南西側から濠側へ突き出した施設であったと考えられる。対峙する墳丘裾部分を調査した平成22年度の第2調査区では、西側の濠底が南側に向かって徐々に高くなっている、南端では標高39.5mと本調査区の北東部と同じレベルを示していた。その距離は約8mで、この間にさらに深い濠底が存在する可能性も考えられるが、濠底が北側から上昇していることを考えると、今回検出した高まりに続くものと考えられる。また、平成22年度の調査報告では、「濠底の標高を比較すると、西側では標高39.5mとなるのに対して、南面の濠底の地山面は標高38.9mで、約0.6mの比高差を有し、明らかに自然地形によるものとは考えられない。そのため、この墳丘南西隅部分の裾や濠では、周濠西辺が同一面で南辺へ続くのではなく、地山を掘り残した施設があった可能性」を指摘していたが、今回検出した濠内の1m以上の高まりを考えると渡土手や土橋のような大きな規模の施設があったと考えられる。ただし、現たため池の内側は深い部分まで「新池」の掘削やその後の浚渫などで大掛かりな工事が及んでおり、今回検出した高まりの本来の規模や構造を復元できる資料は得られなかった。

一方、この高まりがどのような施設になるかについては、古墳の立地する地形的な環境が類似している、峯ヶ塚古墳の南約500mに所在する「清寧天皇陵古墳」に設けられた仕切り土手が参考になる。清寧天皇陵古墳は峯ヶ塚古墳と同様に西側の丘陵側に高い傾斜地に築かれており、周濠全体に水を湛えるためには濠内の仕切る必要があり、地形が高い前方部隅の両脇に土手を設け、前方部前面とその他の墳丘周囲で約3mの差のある周濠の水面を保持している。

峯ヶ塚古墳では、周濠の底面は先述した通り、前方部前面で標高38.9m、後円部前面で標高37.6mと、両端約100mの間で13mの差を有しており、周濠全体に水を湛えるためには、清寧天皇陵古墳と同様の仕切り土手のような施設が必要であったと考えられる。

なお、外濠のくびれ部の延長線上に位置する部分で、内側の堤から外濠に向かって長さ5m、濠底から0.6mの高さを有する施設が突出していることが確認されている。この施設の東側では外濠の深さは1.2mであるのに対し、西側では0.9mと浅くなっていた。また、突出により濠の幅が1m程度に狭められていることから、この施設によって外濠の水位を調整する機能を有している可能性が考えられている。

最後に、南側の堤の内側法面については、第4・5調査区の南端で確認された地山面の人為的な平坦面を考えると、既に削平を受けた可能性が高いと考えられる。平成20年度に確認された古墳築造時の南側堤の天場の標高が42.70m



写真2 外濠に突き出した施設

付近と推定されている。第5調査区で確認された傾斜変換点を起点に30度の傾斜で法面が立ち上がる」と仮定すると、平成20年度の調査区内で法面が検出されることとなるが、調査区の範囲では堤内側の法面は検出されていない。そのため、傾斜をさらに持たせた35度程度あったものと考えられ、現在の土手の下に法面や堤の天場が存在するものと思われる。

遺物に関しては、出土する葺石は過去の調査と同様に入頭大の亜角礫で、いずれも元位置を保つものはないが、その位置から堤の内側に葺かれたものが転落したものと考えられる。なお、その量が少ない点については浚渫などの際に既に取り上げられたものか、元々その葺き方が疎であったのかは現時点では判然としなかった。一方、出土する埴輪は円筒埴輪のみであり、その調整方法やタガ、須恵質の堅い埴輪などが含まれている点などから従来から知られている「川西編年第V期」の特徴を示すもので、古墳が築かれた時期を考える資料が追加された。

今回の調査で得られた成果によって復元整備に必要な資料が補強・追加された。今後、墳丘北西部の墳丘櫛などで発掘調査を行い、墳丘や濠など復元に必要な基本データを整える予定である。

平成25年度には藤井寺市教育委員会とともに「国史跡 古市古墳群保存管理計画」を策定し、その中でこの峯ヶ塚古墳の保存管理や整備に向けた基本的な方針等を検討した。また、当初の計画から相当の年数が経過していることから、実現可能な復元整備の方向性や内容を検討し、府文化財保護課や文化庁へ提示し、十分な調整と協議を行うとともに、早い時期に整備検討委員会を再開し、整備基本計画の再検討をはじめ、必要な計画や設計の策定に着手する予定である。

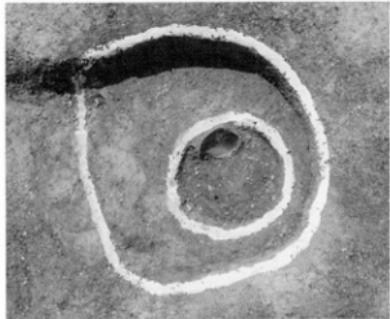
峯ヶ塚古墳は、主体部の一部が調査されており、内容の判然としない古市古墳群の古墳としては内容の一部が明らかになっている稀有な例であり、早期に峯ヶ塚古墳の復元整備を行うことで、古墳や歴史学習の場とするとともに、世界遺産をめざす古市古墳群の理解を深めることができるために、計画的な事業推進を図っていきたい。

# 図 版

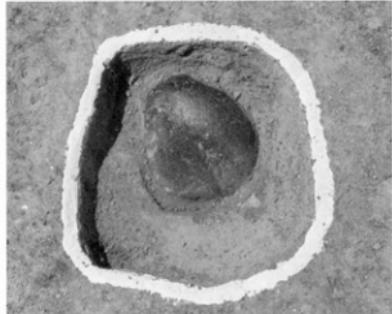
図版一 壺井第3散布地



調査区全景(南から)



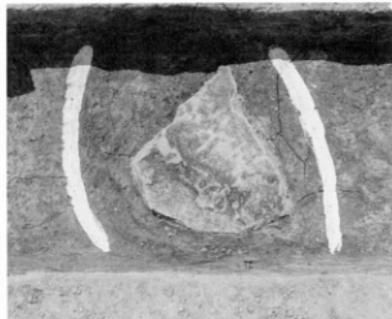
柱穴 検出状況



柱穴 東石検出状況

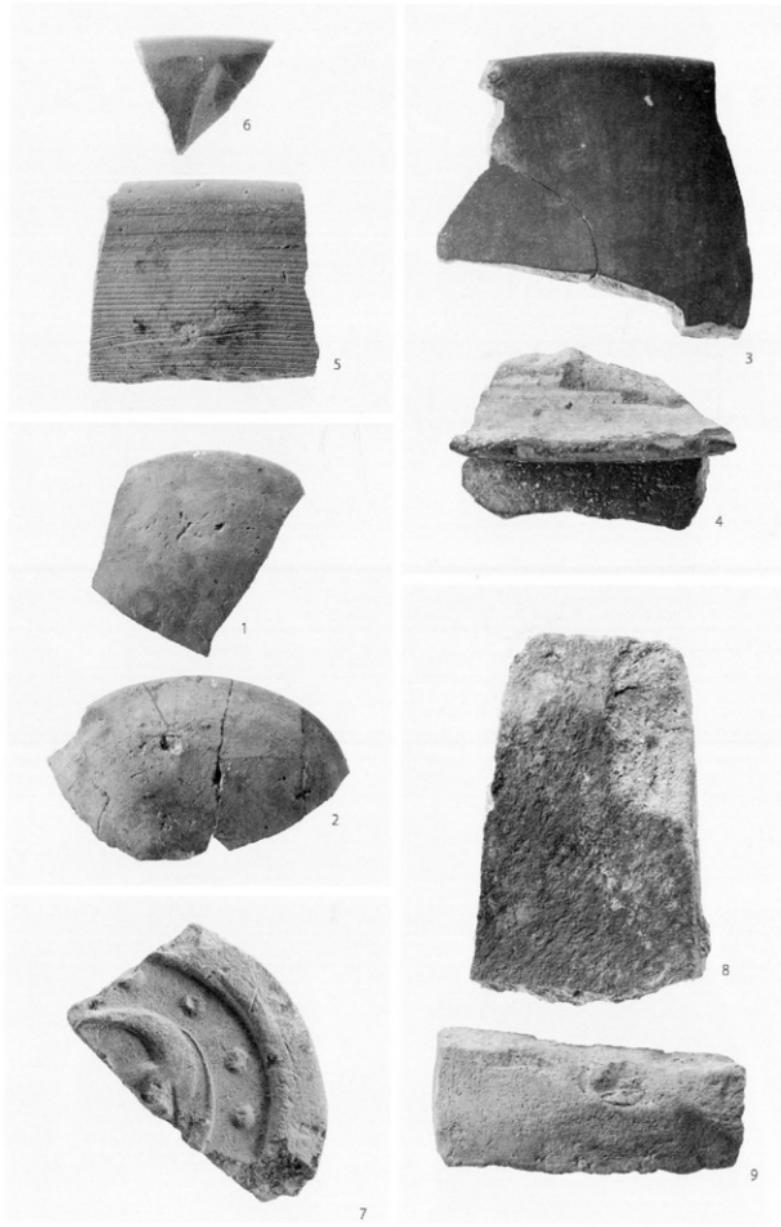


集石土坑全景



柱穴 東石検出状況

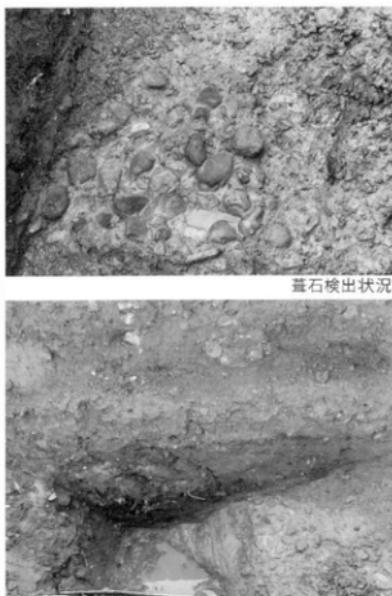
図版二 壺井第3散布地 出土遺物



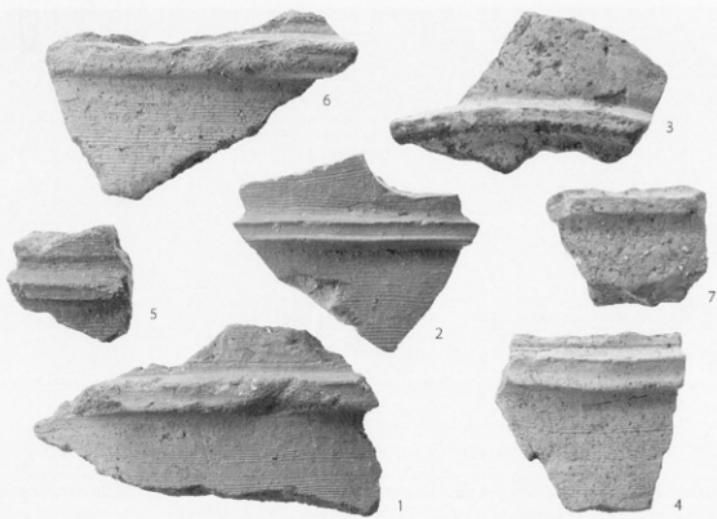
図版三 栗塚古墳



調査区全景(東から)



東壁断面(西から)



図版四 大黒遺跡



第1遺構面全景(西から)

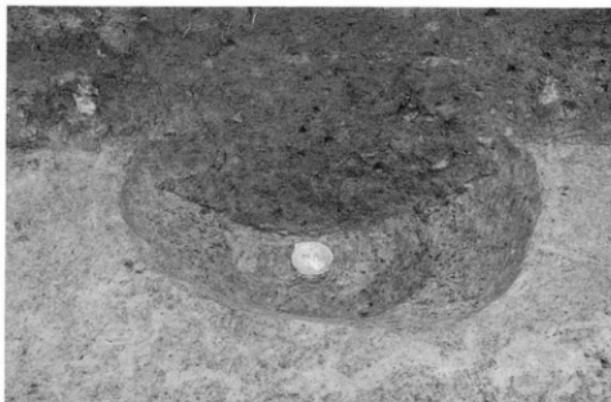


第2遺構面全景(東から)

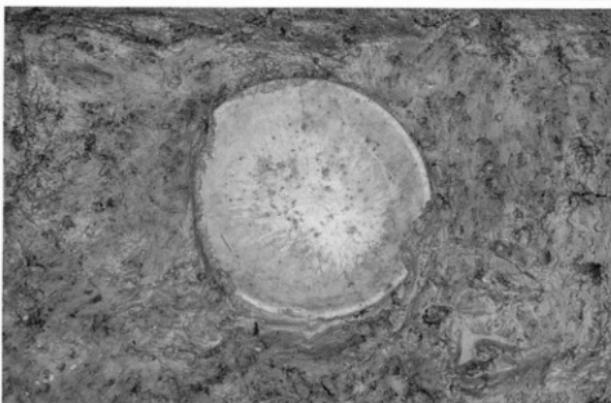
図版五 大黒遺跡



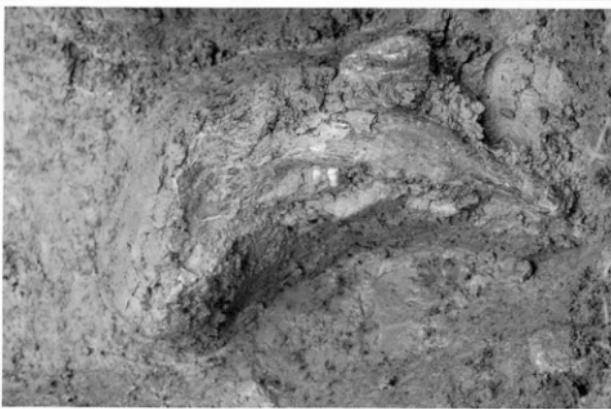
圖版六 大黑遺跡



土坑 全景

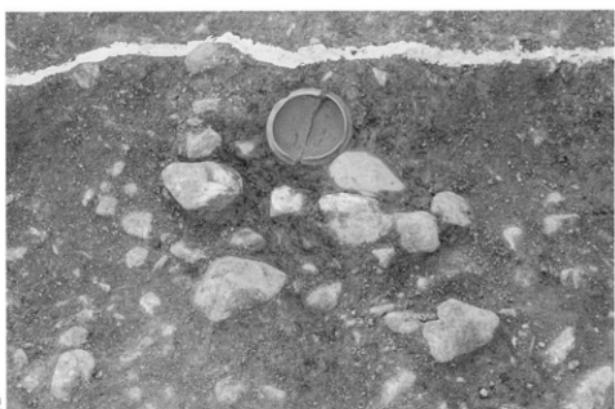


出土状况



馬下顎部出土狀況

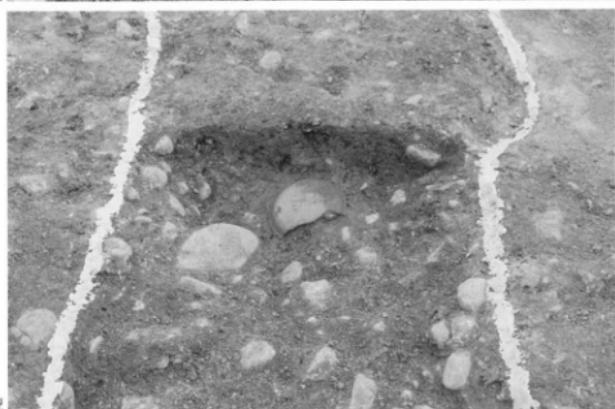
図版七 大黒遺跡



溝1 須恵器出土状況



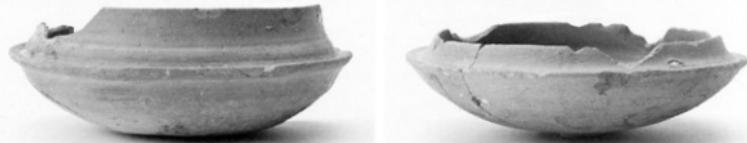
溝1 土師器出土状況



溝2 須恵器出土状況

図版八 大黒遺跡

出土遺物一



1

3



4



2



7



8



10



18



22



17



15



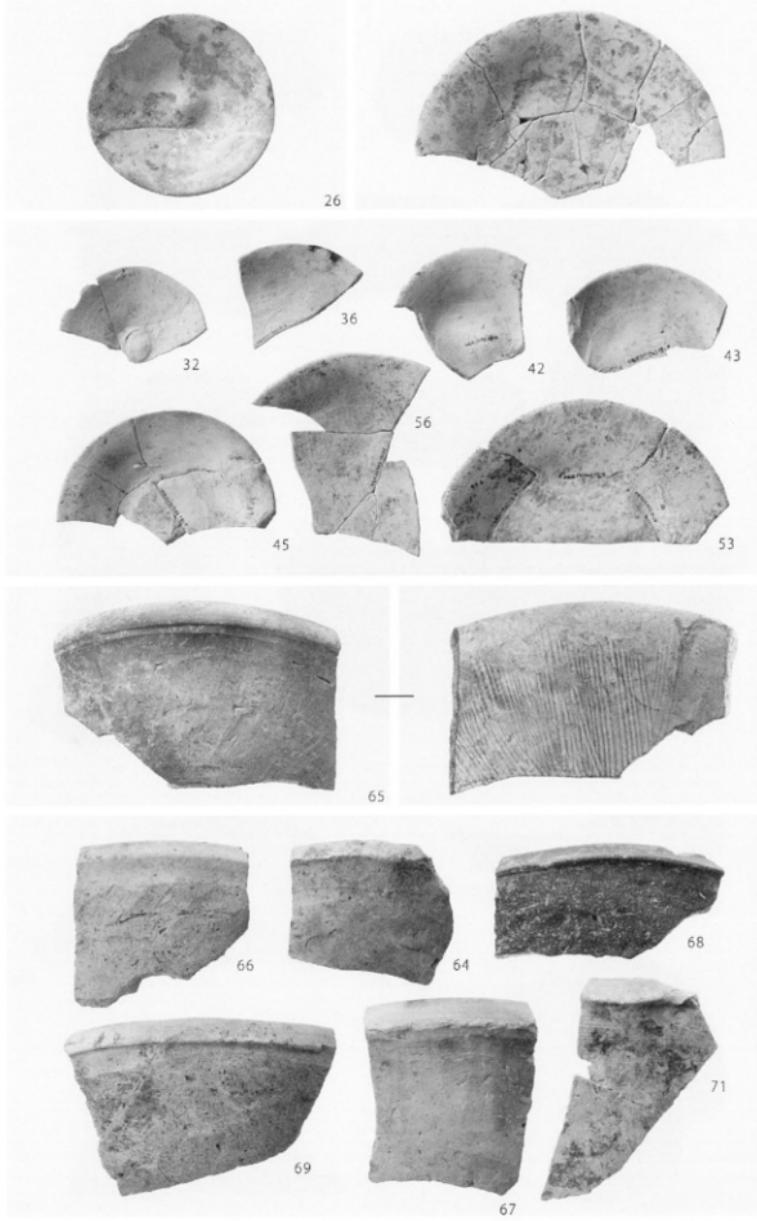
16



19

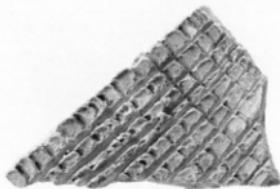
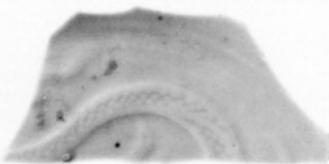
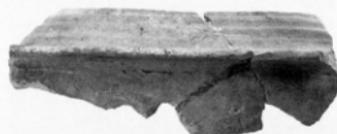
図版九 大黒遺跡

出土遺物二

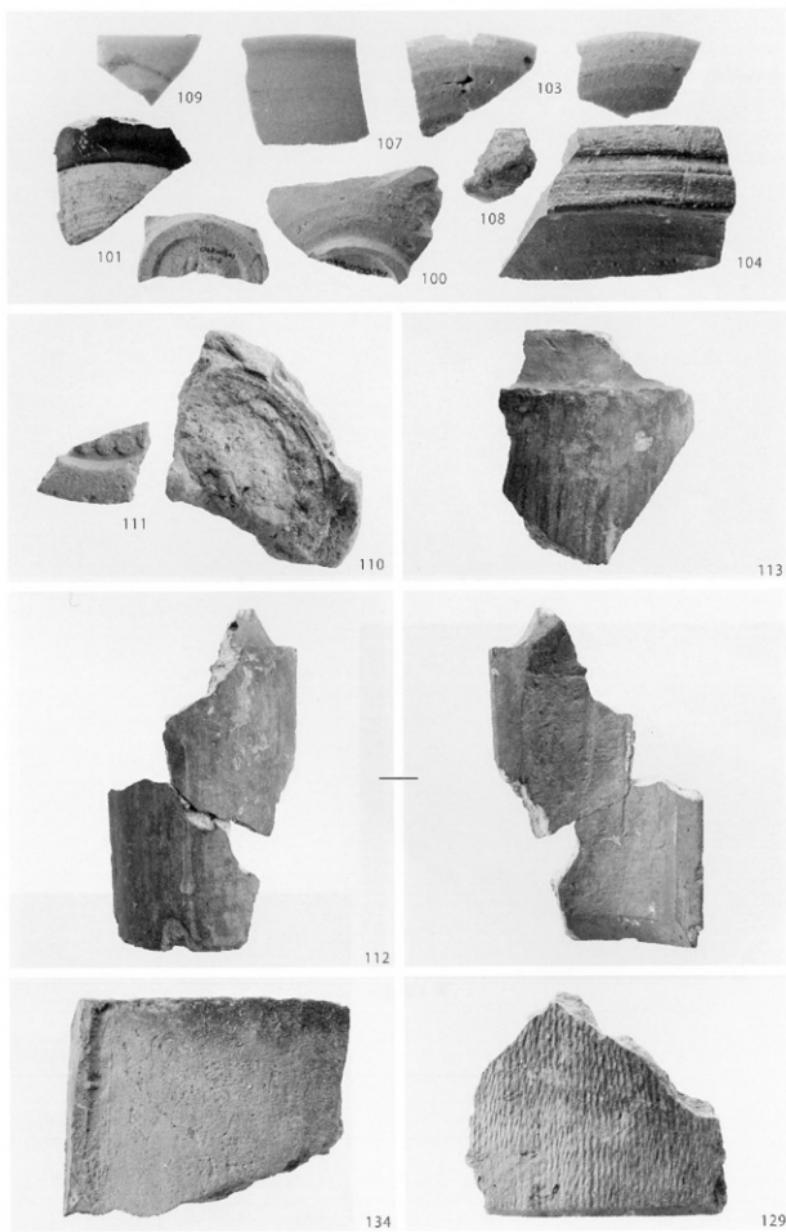


図版十 大黒遺跡

出土遺物三



図版十一 大黒遺跡 出土遺物四



図版十二 峯ヶ塚古墳



調査区全景



第3調査区



第2調査区

図版十三 峯ヶ塚古墳



第1調査区(北東から)



第1調査区(南東から)



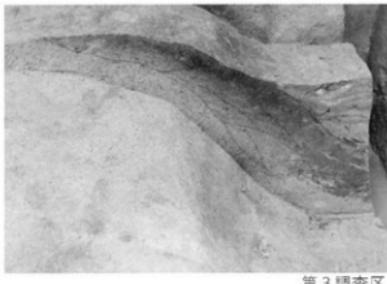
第2調査区(北東から)



第2調査区(南東から)



第3調査区(北東から)



第3調査区



第3調査区 拡張区(北から)



第3調査区 磐石出土状況



第4調査区(北西から)



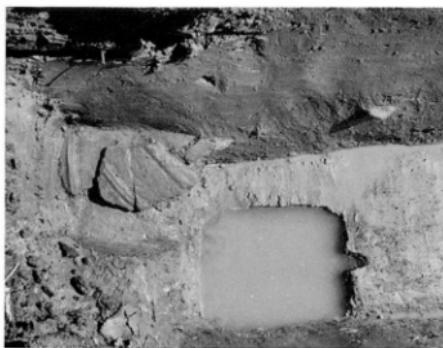
第4調査区(南壁)



第5調査区(西から)



第5調査区(南壁)



第5調査区 環輪出土状況

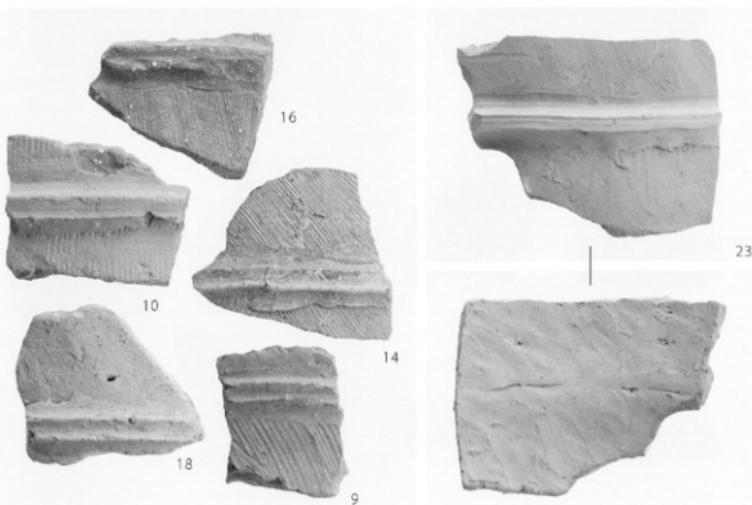
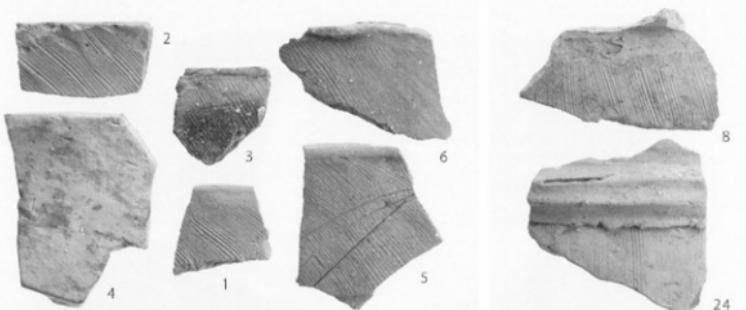


雪の峯ヶ塚古墳

図版十五

峯ヶ塚古墳

出土遺物一



図版十六

峯ヶ塚古墳

出土遺物二



26



25



31



33



38



36



32



30



29



37



35



—



39

## 報 告 書 抄 錄

2015年3月31日

古市遺跡群 XXXI

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書75

発行 羽曳野市教育委員会

生涯学習室 社会教育課

歴史文化推進室

羽曳野市養田4丁目1-1

072-958-1111

印刷 御近畿印刷センター

